

泣きねいりなんて絶対にはや STOPPING SEXUAL HARASSMENT セクハラに負けないうための七ヶ条

文・橋爪大三郎

「コビーをどつたら尻を触れちゃった」事件で課長にしつこくカラまれても「カリカリ頭に来て、言う言葉がなかったでえは違う」「それってセクハラでしょ」、水戸の御公の印刷じゃないけど、かなり鈍感な男でもヒクンとするから不思議。
「炭がなければ考えられないのが、われわれ人間である。SEXUAL HARASSMENT」という横文字が海狗の向こうから下陸するまで、セクハラは存在しなかった。

セクシャル・ハラスメント。「性的いやがらせ」「性的脅かし」などと訳されている。アメリカでは15年以上前から成例でなれ、すっかり社会に定着している。日本でもこの問題に、地道に取り組んできた人たちがいた。でも、それがひとつの力になったのは、つい最近のこと。まず88年10月、「働くことと性差別を考える三多摩の会」が、アメリカの女性グループの小冊子「性的いやがらせをやめさせるためのハンドブック」を翻訳・出版した。これを「モア」89年6月号などを各誌に取り上げて、「ホント、ホント」「うん私も」と共感の輪が広がる。同会と「モア」の英断に拍手、拍手。

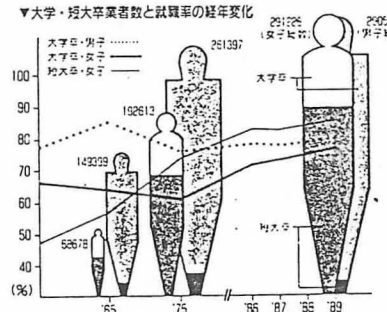
セクハラが、急に騒がれたのはなぜだろう？
本気で仕事に取り組む女性が増えた。まずこれが大きい。女性の就職は、結婚・出産までの「暇かけ」みたいに見られてきたけれど、最近では女性の学歴も意識も高まって、実力がついている。好況と人手不足で企業も女性の力なしでやっていけない。これに弾みをつけたのが、「男女雇用機会均等法」(86年4月施行)。
元氣印の女性に、男性の意識が追いつけないのも、セクハラの原因になっている。男社会に甘やかされ、女性を対等なパートナーと見られない、困った縁のついている男たち。たとえば……あなたの職場のほう、彼です。
セクハラをきちんと、定義してみよう。

セクハラをきちんと、いろいろな段階がある。ひと口にセクハラといっても、いろいろ段階がある。
セクハラが、急に騒がれたのはなぜだろう？
本気で仕事に取り組む女性が増えた。まずこれが大きい。女性の就職は、結婚・出産までの「暇かけ」みたいに見られてきたけれど、最近では女性の学歴も意識も高まって、実力がついている。好況と人手不足で企業も女性の力なしでやっていけない。これに弾みをつけたのが、「男女雇用機会均等法」(86年4月施行)。
元氣印の女性に、男性の意識が追いつけないのも、セクハラの原因になっている。男社会に甘やかされ、女性を対等なパートナーと見られない、困った縁のついている男たち。たとえば……あなたの職場のほう、彼です。
セクハラをきちんと、定義してみよう。

ちょっとからかう、軽くタツチ、から始まって、深刻なものまで、なかでも特に激辛で手に負えないのを、セクシャル・ハラスメントといふ。というわけじゃないね。
冗談はさておき、何をセクハラに含めるのか、定義がやっかいた。アメリカの雇用機会均等法委員会のガイドラインあたりを参考にまとめてみると、こうなる——
「こじが嫌がっているのに、言葉や行動で、性的な意味にとれる振る舞いにおよんだあげく」
(1) 性的要求に応じないと、給料・昇進が不利になる。職場をやめさせる、など脅したりする。または、
(2) 不快感をあたえ、職場に性に関する話をする。または、
(3) 要するに、職場の誰かに性に関する話をしてあなたを嫌な気持ちにさせているなら、立派なセクハラだ。

見ず知らずの女性を狙う「痴漢」や、アブノーマルな性には興味を持たない「変態」にくらべても、セクハラは始末がわるい。職場や学校で、ふつうの顔をした男性のやることなので、逃げ場がないからだ。
誰にセクハラされたかというアンケートの回答をみると、深刻なケースでは特に、圧倒的に上司が多い。30代・40代の企業主や部長クラスで妻子持ち、が典型的。同僚の男性から、という訴えはわずかだ。
セクハラ、特に11のようなことを平気とする男性は人間にかなり問題がある。困ったことに、そういうのがまだうようよいる。ただ彼らも、同僚の女性にはちよっかいを出しにくい。その程度の自罰はあり、役付きになつてから、立場の弱い部下に狙いをつけるものだ。
この習性を逆手にとるべきだろう。力関係不利とみれば、彼らも手は出せない。根は弱いのだ。だから、セクハラなんか寄せつけない職場の雰囲気を作れば、けつこつおとなしくなるはずである。

セクハラは、なせ許せないのか
セクハラを扱った本が、店頭になくさん並んでいる。実例が豊富なのはいいけれど、セクハラがどういう行い



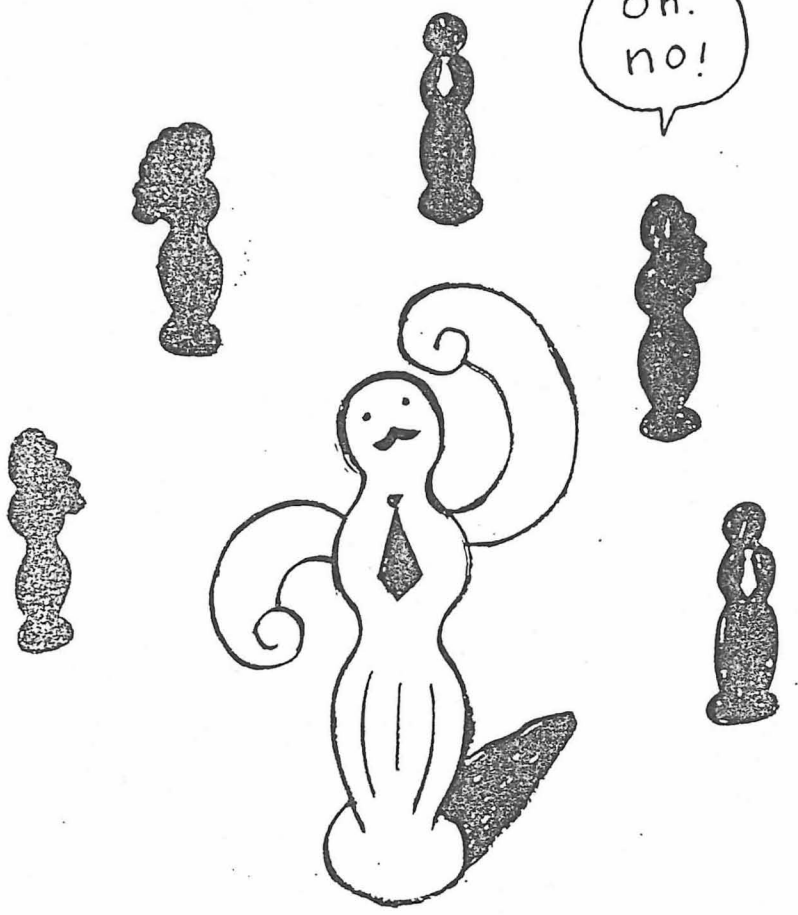
大卒は、大学・短大卒業生の数を表す。高卒は、高卒者の数を表す。就職率は、就職者数を卒業生数で割った割合を示す。このグラフは、文部省「労働力調査」及び「就業率調査」の結果をもとに、フリーハンドで作成したものである。

なの、精悍のいく説明や分析が少ない。そこでスバリ、セクハラの本質だが、これは一種のルール違反なのである。
女性の身体は彼女自身のもの。気やすく触ってはいけない。彼女の人格とともども、尊重されるべきだ。これが一般社会の、そしてもちろん職場のルールである。それでも、触れるのは——彼女の恋人だけである。
嫌がられている(つまり、恋人でもない)相手に、性的にふるまうだけでも、れっきとしたハラスメント(不法行為)。そのうえ、自分の地位を利用して女性を脅すなんて、卑劣そのものだ。性的要求に屈すれば、罵詈雑言に苦しめられる。拒否すれば、仕返しがかこい。
仕事に関係ないこと(性的魅力)を人事や昇給の材料にするなんて、公正でない。これもルール違反。その共犯者になれば女性に強いのは、彼女ばかりでなく、同じ職場で働く男女全員に対する差別行為、敵対行為だ。
セクハラをなくすには、じゃあ、どうしたらいいか？
女性の社会的地位が向上すれば解決する、という議論がある。女が上司になってこらん、誰も彼女にセクハラ

なるほど一理あるけれども、それには時間がかかる。とでも待てない。ほかに打つ手はないものか。
アメリカのセクハラ裁判では、女性が会社を訴えて、軒なみ勝訴している。セクハラを職場に野放しにして、いるのは企業の責任。セクハラは性差別だ。会社はセクハラをなくす義務がある。こういう判例がじゃんじゃん出ている。日本の女性も、セクハラのない職場で働く権利を要求し、会社に認めさせるほうがいい。
その第一歩として、セクハラ男を征伐しよう。
セクハラ退治の正攻法・七ヶ条
どんな職場でもすぐできるのは、こんなやり方だ。
その1. その場ではつまり、ノーと口。最初が肝心。無視しようとする、事態は悪くなる。相手をセクハラ

その2. このペーシをコピーして、女性の同僚に配ろう。孤立していると思われ、狙われやすい。女性の連帯が大切だ。もちろん理解ある同僚男性も巻きこむ。
その3. セクハラに関するアンケートを、職場に実施してみよう。みんなの関心が高まると、雰囲気も変わる。セクハラ男への、無言の圧力にもなるはずだ。会社内の三多摩の会が、アンケート用紙を送ってくれます。
その4. 目にあまるセクハラ男には、直接口頭で抗議する。その際証人として、仲間の女性に立ち会つてもうおう。あとあとのため、そういうことも全部記録しておく。
その5. セクハラ男に抗議の手紙を出す。できれば職場の女性同僚と連名がいい。郵便局から「内容証明」で。その6. セクハラ男の上司や、組合に、事情を訴える手紙

程度は軽いセクハラなら、以上までの1-7までの手順を踏むだけで、打開の糸口が見えてくると思う。
もつと深刻な(たとえば、上司と同僚も関係を強いられたみたいなど)ケースだと、事件を長沙汰にすることで、当の女性をますます苦しめてしまう。だが、公表しないと、セクハラを証明できない。作戦がむずかしい。
こつこつケースは、早めに弁護士に相談したほうがいい。そして、セクハラ男をどこまでやりこめるかは、本人の判断に任せよう。大それたのは、本人の苦境を救うこと。とりあえずこれ以上のセクハラを食い止める一方、職場で彼女をとりまく仲間づくりを進める。男性もひととめに悪者扱いせず、ひとりずつ味方につける。そしてあべこべに、セクハラ男を孤立させよう。そうやってセクハラ男の再発を防止し、女性が安心して働ける風通しのよい職場になれば、一応よしとしましょう。



He is abnormal.

セクハラ関係の参考書

というわけで、セクハラと戦うには、よその会社の実態なども勉強しないためだ。参考書を一冊だけあげておくと、女と男の21世紀を考える会・編著「スクランブル講座/セクシャル・ハラスメント」(JICC出版局・三凡) (四) 冒頭の津原由美さんの文章がよい。ほかの参考書にこんなものがあるか、各地の相談機関の連絡先なども扱っている。

よりよい女と男の関係のために、「疑問を」
橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 専攻は社会学。著書に「冒険としての社会学」(毎日新聞社)など……最近になって「おれ、おれ、おれ」を考へた。注:「おれ」は「おれ」の誤り。注:「おれ」は「おれ」の誤り。注:「おれ」は「おれ」の誤り。

セクハラ退治の「アンケート」用紙は、東京労働局労働関係課(東京都千代田区千代田1-1-1)に請求すれば、郵送で送付される。請求書は、労働局のホームページ(www.kourin.metro.tokyo.lg.jp)からダウンロードできる。注:「おれ」は「おれ」の誤り。

いつまで続く片想い？ 曲がり角の日米関係には、要注意なのだ

文・橋爪大三郎

アメリカは強かった。懐かしいハリウッド映画を観るにつけても、アメリカがどんなに自信たっぷりだったか、よくわかる。ジョン・ウェイン。ハンフリー・ボガード。カーク・ダグラス。チャールトン・ヘストン。……ありつかけの富がアメリカに集まり、未来は金色に輝いていた。アメリカはほんとうに強かった。

あり余る国力を背景に、世界の保安官を買って出た。二千年の代わりには、核兵器とドル紙幣。自由世界を守るんだ。の意気込みで、デモクラシーと英語とココアを、地球狭しと配って歩いた。

もともとのアメリカは、こんな出しゃばりだったわけじゃない。よそで戦争が起ころうと、われわれも、高みの見物を決めこむ。これを、モンロー主義（マリリン・モンローと関係ないです、念のため）という。だから第一次大戦では、土壇場まで参戦をしぶった。第二次大戦の時も、真珠湾を攻撃されてからやっと、重い腰をあげてドイツに宣戦布告。出遅れがたり、ファシズム退治に手こずる。それに懲りて、一八〇度の方針転換。よし、これからは、先手必勝だ。

ら、ぜひ目を通して。大体こんな内容だ。

①日本に外敵が侵攻してきたら、アメリカ軍に協力してもらって追っ払う。
②だからアメリカは、日本に基地を作ってよい。
③その代わり、日本は、日本に外敵に攻撃されたら、日本（自衛隊）も協力して追っ払う。
形のうえでは、お互い助け合おうという話だが、その実はアメリカに、おんぶに抱っこである。

似たような条約を、アメリカは、韓国やフィリピンとも結んでいる。だからやっぱり米軍基地がある。日米関係は、片想いもいいところ。
アメリカは一九四五年に、敗戦国日本を占領。いろいろ親切にしてくれた。それなりの、計算もあって。でも日本人は、これを勘違いした。こんなに親切にしてくれるんなら、もう仲良く、甘えて大丈夫だ。で、いつの間にかみんな、アメリカのファンになっちゃった。日本人は、どの国が頼りになりますかと聞くと、たいしてアメリカを答える。自由で豊かな国だから、アメリカは世界中で人気がある。

困るのは日本人が、アメリカだつてやっぱり、日本のことを思ってくれているはずだ、と勝手に決めておられることである。ところが、アメリカが調査してみると、日本を信頼してくれているのは、10人にせいぜい1人か2人。そりゃあさうだ。アメリカ人のふるさとは何と言つてもヨーロッパ。日本なんかはつきり言えば、どうだつていいのだ。このギャップ。
●日米同盟が本音の、日米安保条約
一九五一年、サンフランシスコ講和条約が結ばれ、翌年日本は独立した。そのときセットで調印されたのが、日米安保条約。早い話が、日米の軍事同盟である。当時の吉田首相は、こんなふうを考えて、安保条約を結ぶことにしたという。
明治・大正の日本が、順調に発展できたのはなぜか。それは、欧米の列強とい関係を保てたからだ。特に、

日英同盟(22)が大当たり。当時の世界最強国、イギリスと同盟を結べたおかげで、ロシアとの戦争にも勝てたし、なにかにつけ順調に事が運んだ。

ところが日本が変に自信をつけ、軍事的野心がひとり歩き始めると、日英同盟も解消されてしまふ。そして事あるごとに、列強と衝突。ついには破滅的な戦争に突入した。
この二の舞を避けるには、やはり世界の最強国、つまりアメリカと、同盟を結んでおくのがよい。この同盟あるかぎり、日本は安泰だ。
——こんな吉田首相の読みが、ずばりの中、おかげで戦争の心配もなく、石油も食糧も買い放題。戦後の自由貿易体制で、いちばん得したのは日本である。
●アメリカの舞台がゆるんでいる
ところがアメリカが、だんだん弱くなってしまった。

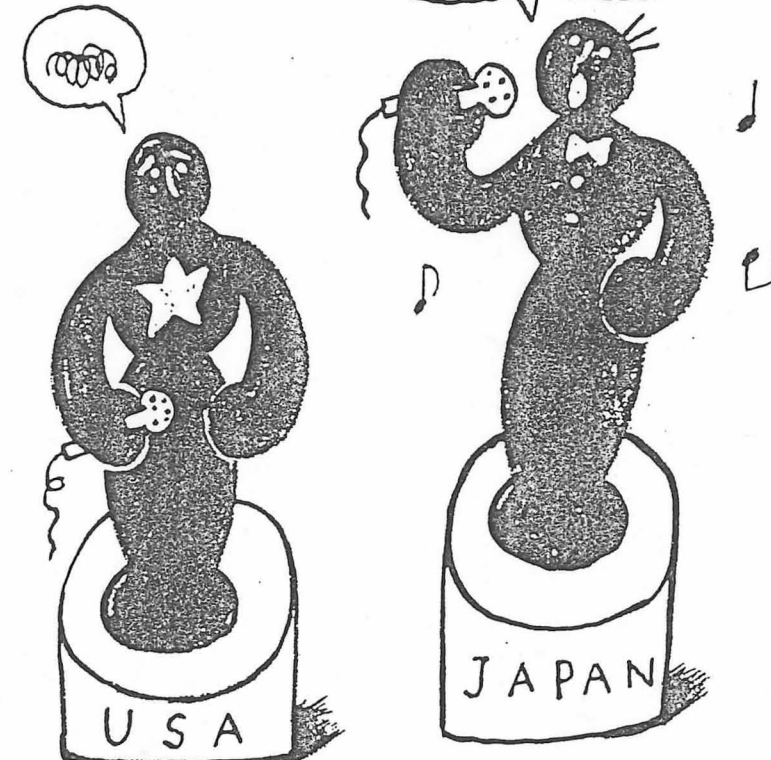
▼日本・アメリカそれぞれの信頼できる国

○：あなたが信頼できると思う国はどこですか？

●日本人の答え (%)		●アメリカ人の答え (%)	
1位	アメリカ 53.8	1位	カナダ 72.7
2位	イギリス 51.3	2位	イギリス 51.8
3位	オーストラリア 34.6	3位	オーストラリア 48.2
4位	フランス 33.0	4位	スイス 41.2
5位	スイス 30.7	5位	スウェーデン 37.0
6位	カナダ 30.3	6位	フランス 32.7
7位	西ドイツ 29.3	7位	西ドイツ 23.1
8位	オランダ 11.7	8位	ノルウェー 22.5
9位	スウェーデン 10.4	9位	ニュージーランド 18.5
10位	イタリア 9.8	10位	イタリア 16.5
11位	中国 9.0	11位	日本 15.1

注：グラフ中のパーセンテージは、質問回答から算出されたもの。また、上記のグラフは、1989年11月28日付の読者調査に基いての読者調査結果。ギャラップ社の共同調査の結果をもとにル・クル編集部が作成したものである。

Do you like Rock'n'Roll?



橋爪大三郎(はしづめ たいさぶろう) 社会学者。著書に「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)などがある。……去年は、まれにみる激動の1年でしたが、それをどう考えたのか、議論が不足しています。われわれの考える以上に巨大になった日本の、責任も重いのです。
読者の皆さんの知りたいテーマ・疑問などを歓迎します。社会現象、ニュースを見ての疑問、これまで人に聞けなかったことなど何でもOK/＼どしどし編集部「社会科学院」係宛に送ってください

戦前直後 アメリカのGNPは、日本の百倍以上もあった。それが去年は、たったの1.7倍。1人当たりの所得に直すと、もう日本に追いつかれている。ベトナム戦争が、特にいけなかった。金より値打ちがあると言われたドル紙幣も、ばらまき過ぎて信用をなくし、変動相場を下落し続ける。おまけに、慢性的なインフレ、失業、麻薬や犯罪増加に悩まされ、景気も低迷。昔の夢よう一度、とハリウッドから乗りこんだレীগランド大統領も、「双子の赤子」を残して去って行った。

一段と厳しさを増している。10年前のベストセラーはE・ホーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバールワン」、まだ日本を持ち上げるゆとりもあった。それが去年は「フアアロース」の「日本封じ込め」みたいな、ジャパン・バッシング(日本叩き)の本が店頭に出積。ロックフェラーセンターやコロンビア映画の買収も押控を巡って、対日感情は悪くなる一方だ。日本はこがけがない——アメリカの言い分「フェアでない」というのが、日本が嫌われる最大の理由である。アメリカ人に言わせると、日本は自分たちと同じ土壌、同じルールで勝負をしてない。働きすぎ、日

本株式会社、兎小屋、流通が複雑なこと、コメの輸入禁止……日本人のやることは、みんなズルイ。最近では、アメリカに工場を建てた日本企業が、本社で英語を使わないことまで、槍玉に上がっている。
なかでも目立つのが、防衛費だ。GNPの1%を懸いているが日本、アメリカは、GNPの7%にもなる。も少し負担しろよと、アメリカはブチ切れている。
問題を小出しにしてもチがつかないの、まとめて注文をつける作戦に出たのが、去年からの「日米防衛協議」だ。外国人にわかるように、日本の社会を強固にしてほしい、という注文である。

NO! と語るだけで、いいの
そこまで指図されてはたまらないよ、と反発する人も増えてきた。折から、ソニーの盛田昭夫氏と石原慎太郎代議士の共著「NO」と言える日本(光文社)が評判である。アメリカの無理難題には、日本もノーと言ってきた。が主張高、今となれば日本は安保を学ばずしよ必要としないし、現状程度なら自前で十分にやれる能力を持っている」とも書いてある。
アメリカはこの作りを読んで、ギクリとした。アメリカから見たって、日米安保条約はたしかに見直しの時期にきている。ゴルバチョフのソ連は変わった。東欧は脱共産党の、控前線で、冷戦も「封じ込め」ももうおしまい。「仮想敵国」がいなくなつて、条約も出さずきかかっている。

50年前、何でアメリカと戦争になったか、思い出してみよう。日本は中国を、まるまる支配下に取めようとした。それがアメリカを、まるまる怒らせた。日本は理解できなかった。おまけに、宣戦布告も届かないうちに、真珠湾を奇襲。こういうルール破りを、アメリカは決して容赦しない。日本が過去の苦い教訓を忘れるなら、もう一度敵国みたいに思われても仕方ない。
アメリカ並みの豊かさを、日本はひたすら追いかけてきた。でも、国体がかんくなったからと、アメリカにノー一と言っただけじゃ、反抗期の中学生と大差ない。世界の一品として、どういふ大人の責任を果したのか、ちゃんと日本もプランを作って、説明しなさいよと、アメリカは、アメリカにとって、いまの安保条約は、日本をハイテク軍事大国にしないための、鎖である。この鎖を引きちぎって壊れ出さないかと、内心相当に警戒している。瀬戸際の日米関係。それだけは、肝に銘じておくとい。

*「封じ込め」は日米防衛協定を指している。1941年12月11日日本がドイツとイギリスに宣戦布告した。
*「NO」と言える日本、1980年に出版されたもの。*防衛費(日本のGDPの1%)と防衛費(日本のGDPの7%)と、双子の赤子という

このさきどうなるペレストロイカ ゴルバチョフはソ連を救えるか

文橋爪大三郎

1990-7-4/12

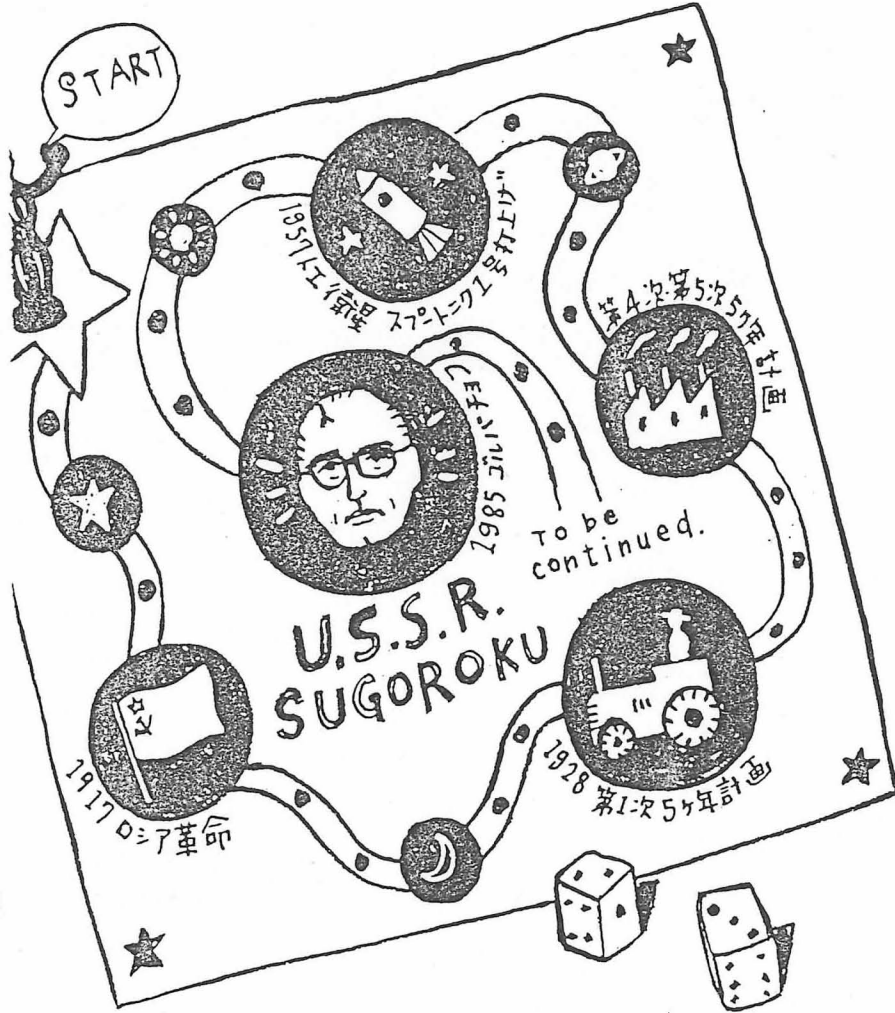
「ル・クル」第2巻第6号 pp.162-163
学習研究社 (1990年6月号)

今から35年前、まだ髪の毛もふさふさのゴルバチョフは、故郷スタヴロポリで、駆け出しの共産員だった。「すまないなあ、ライサ。ボクの給料は、君の半分以下だ。おまけに、こんな生活をかけて」
「この町のため、あなたと一緒に働いて幸せだわ」
「モスクワ大学のマドンナだった君だ、なにもこんな田舎町に来なくて、ほかにいくらも……」
「何言ってるの、ミハイル！ あなたは、この祖国が必要とする人物なのよ。私には分かるの」
「……言ったかどうか知らないけど、教授費かなライサ夫人に別を磨かれ、めきめき出世、とうとう書記長に。まともな大卒の最高指導者は、レーニン以来である。ペレストロイカのために生まれた男」
高齢でよぼよぼのチェルネンコが、一九八五年三月に病死すると、政壇を駆け上った若手、ゴルバチョフが、ライバルを押し退けて後継者に選ばれた。わずか一ヶ月後にはペレストロイカ(立て直し)政策に着手、そのあとも矢張り、大胆な改革を打ち出している。
そのあとのことはTVや新聞で、皆さんよく存じ。民族危機の嵐が吹き荒れた去年から今年にかけて、ゴルバチョフの声が高まったが、改革のビラを早く、三月には憲法を改正して、みずから大統領に就任、ひとまず島端を走り切った。

も正しいから、ほかの党なんかなくていい(一党独裁)。国家のうえに立つて政府を指導し、軍や警察も握っている。共産党が間違ってる。なんて言おうものなら、たちまち「反革命」の烙印を押されてシベリア送りか、銃殺だ。ついでの間までは、そうだった。
ソ連の経済は計画経済で、何をどれ位作るか(フルマ)も、ぜんぶ共産党が指図してきた。でもこれが原因で、経済が停滞してしまふ。共産党なんか、なくていい——と書いたところだけ、下手にそれを言くと、どんな目にあうかわからない。
ゴルバチョフは、チャンスをつとめた。書記長になるまでの我慢。書記長は、党内の最高権威。党のトップが改革を言い出せば、さすがの共産党も、首根っこを押さえられたかたちになる。
ゴルバチョフが幸運だったのは、同じスタヴロポリ出身のアンドロポフがレールを敷いてくれたことだ。アンドロポフはKGBの議長を15年も務め、共産党幹部の腐敗や経済のダメージ加減を、いやというほど目にしてきた。ブレジネフが死んだあと書記長になった彼は、さっさと汚職の摘発に乗り出し、だらけきった幹部を裁き上げられる。いっぽう、ゴルバチョフやリガチョフのような、有能な若手をどんどん登用。改革が軌道に乗るかに見え、国民も活気づいた。それも束の間、腎臓病であつて死んでしまふ、みんながっかり。
かつてはアメリカを追い越すことを目指したソ連が、どうしてこうまで落ち目になってしまったのだろうか？ それを理解するには、歴史を振り返る必要がある。
スターリン時代の、負の遺産
一九三〇年代、相次ぐ五年計画の成功で、書記長のスターリンは、得意の絶頂だった。国中のコンビナートで建設の音が響きわたった。
でもなにも、舞台裏がある。
当時のソ連は、周囲を資本主義国に囲まれて孤立していた。社会主義建設をしようにも、外国の資金はあてにできない。仕方がないからスターリンは、農業に目をうつ

●ソビエト社会主義共和国連邦の構成国一覧

国名(連邦)	独立年	面積(千km ²)	人口(万人)	首都	主要民族
アゼルバイジャン共和国	(1936)	86,600	5,800	バクー	アゼルバイジャン人
アルメニア共和国	(1936)	29,740	3,400	エレバン	アルメニア人
ウクライナ共和国	(1936)	205,300	51,200	キエフ	ウクライナ人
ウズベク共和国	(1924)	1,300,000	1,800	タシュケント	ウズベク人
エストニア共和国	(1940)	30,400	1,500	タリン	エストニア人
カザフスタン共和国	(1936)	1,900,000	1,600	アルマトイ	カザフ人
キルギス共和国	(1936)	199,000	410	フルンゼ	キルギス人
グルジア共和国	(1936)	69,700	520	トビリシ	グルジア人
白ロシア共和国	(1939)	207,600	1,000	ミンスク	白ロシア人
タジク共和国	(1929)	141,500	480	ドシャンベ	タジク人
トルクメニスタン共和国	(1924)	148,500	330	アシュガバト	トルクメニスタン人
モルダヴィア共和国	(1924)	33,100	410	キシニョフ	モルダヴィア人
ラトヴィア共和国	(1940)	64,600	260	リガ	ラトヴィア人
リトアニア共和国	(1940)	102,700	360	ビリユス	リトアニア人
ロシア共和国	(1917)	4,000,000	14,500	モスクワ	ロシア人



けた。農業集団化を断り、農民を一ヶ所に集め、無理やり働かせる。取扱はこつこつと、国家が取り上げる。喰うや喰わずの農民が文句を言つと、たちまちシベリア送り。そうやってかき集めた資金を、重工業に集中的に投資した。高度成長の踏み台にされた農業は、こつこつとソ連経済のアクレス鞋になってしまった。
こういう強引なやり方に、反対の委員も多かった。疑ぐりぶかいスターリンは、それも片っ端から捕まえて、銃殺したり収容所に押しこめたりした(血の粛清)。
それでも書記長の権威は絶対だから、スターリンの目の黒いうちは、誰も表立って批判できない。やっと一九五六年になって、フルシチョフ書記長が歴史的なスターリン批判の演説をする。でも、社会の仕組みはそのまんま

フルシチョフもまもなく失脚してしまつた。
ソ連の工業力は、その頃までかなり水準が高かつた。ドイツの戦車も、ソ連の戦車にかかれればイチョコロ、世界初の人工衛星スプートニクを打ち上げたのもソ連である。でもブレジネフ時代に、コンピュータやハイテクの開発が遅れ、気がついてみたら、虎の子の工業もまったくと時代遅れの代物になってしまつてた。
民族問題はペレストロイカの命とりか
スターリンの負の遺産はもうひとつ、民族問題だ。ナチストドイツに攻められ、大祖国戦争で二千万人も死者を出したのに怒り、スターリンは東ヨーロッパの国々を衛星国家にした。ソ連自体もいろいろな民族の

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 専攻は社会学。「言語ゲームと社会学論」「仏教の言説戦略」(勁草書房)などの著者。……市民が力を合わせれば、社会は変えることができるんだ、としみじみ思う毎日です。日本人もまごまごできない、社会学の任務は重い。

読者のみなさんの知りたいテーマ・疑問などを歓迎します。社会事象、ニュースを見ての疑問、これまでに人に聞けなかったことなど何でもOK / どしどし編集部「社会科学院」係宛にお送りください。

このままではソ連がもたない、ゴルバチョフは、大統領制の導入に踏み切った。
共産党はソ連の屋台骨だったが、白旗に喰い荒らされたみたいだ。いまや崩壊寸前、急いで代わりの支えを探さないと、ソ連そのものが倒壊してみんな下駄きになつてしまふ。共産党の指図系統が時代錯誤。複数政党制と自由選挙を採り入れないためだ。保守派は国民に愛想づかされてるから、ほとんど当選できないだろう。混乱の過渡期を乗り切つたため、自分が大統領になつて、視みを利かせる。先走つた民族主義も、自由化への目程がはつきりすれば、少しは落ち着くはずだ。保守派の巻き返しを封じこめ、急進派の行き過ぎにもブレーキをかけるため、共産党より上立つ国家権力=大統領制がどうしても必要だ——というのが、ゴルバチョフの簡書きである。
このさきどうなるペレストロイカ
こつこつと、簡書きどおりに進めば、先行きはまったく予断を許さない。
スターリンに無理やり、ソ連に編入されてしまつたバルト三国は、この機会を逃さず独立したいと焦っている。ソ連の憲法には、共和国は連邦を離脱(独立)できると書いてあるから、止めるのはむずかしい。それを見て、イスラム系の共和国やウクライナあたりも、独立したいと言ひ出しそつた。そうなら、ソ連はバラバラ。昔、ウィーンを首都にしたオーストリア・ハンガリー帝国というのがあったが、いろんな民族が独立したあと、オーストリアだけになってしまつた。ソ連も最後は、ただのロシア共和国になってしまひそつた。
それもやむをえない、人びとが選んだらなら、そしてそれが人びとの幸福につながるなら。ゴルバチョフはそこまで、覚悟を決めたみたいだ。急進派のエリツィンが次の大統領に選ばれるなら、それもいい。ただそれまでの5年間、いやたとえ3年間でも、自分が大統領としてペレストロイカが根づくのを見守つていよう……。
共産党独裁とソ連は、同時に誕生した。その両方にもま棒を引こうというゴルバチョフは、裏返しのレーニンなのだ。日本もこの際、北方領土を返してもらおう、なんてケチなことばかり考えていないで、ソ連の人びとのため何かできることはないか、知恵をしぼるべきだろう。

イラスト: 橋爪大三郎
* 民族問題
* ソ連憲法第6条
* 急進派のこと
* ソ連では大祖国戦争という
* 急進派の急進派が定められていた



消費税に反対していればすむのか

衆参ねじれ国会は民主主義の止念場だ

文・橋爪大三郎

今日のおやつはアイススクリームウ? 百田君を振りしめ、るるんるんと近所のコンビニに駆けつけた小学生が、あれれ? 手ぶらで帰って来る。「ショーヒーがあと3分足りないって、売ってくれなかつたよ。」

でも消費税は、そこがいいのだと思う。子供のころから、自分も税金を払っているんだと、毎日にシビレ感でいる。給料天引きの所得税は、こうは行かない。これで納税者感覚が身につくのなら、安いものだ。

その昔、大平内閣の「一般消費税(78)」は総スカン。中曽根内閣の「売上税(89)」も被った。二度目の正真正と、気配りの竹下内閣が得意の根回しで「消費税」を成立させてしまった。

野党に水の国民からは、不満が噴出した。増税になったら嫌だ。面倒で困る。なんかすっきりしない税だ。消費税が、なぜ必要か。消費税の、どこに反対か。それを国会で、みっちり議論し直すはず...だったのに、どうも最近、流れが見えにくい。どうなってるの?

ひとつの理由は、国会の片側が、消費税が通った頃とまるで変わったこと。いわゆる、衆参「ねじれ現象」だ。画期的な出来事なので、まずこれを考えましょ。野党に「大抵派なみの拒否権」

予想通り(本誌15月号)自民党は底力を発揮、2月の総選挙で290議席を獲得した。土井たか子で片側の社会党も大躍進、あおりで、公明・民社・共産が苦杯をなめた。対する参院では、去年7月の選挙で自民党が惨敗、大きく過半数を割りこんでいる。参院には「解散総選挙」がないから、少なくとも6年はこの状態が続く。

こんなことは、戦後初めて、自民党もほとほと頭を痛めている。今までみたいに、思い通りの法律を作ることができなくなってしまうからだ。

必要。衆院を法案が通過しても、参院を通らなければそれまでである。(これがいやなら、もういちど衆院で三分の二の多数で可決し直すしかない)つまり、参院の野党が結束して「NO」と言えば、政府・自民党の提出する法案はみな、ただの紙切れに終わる運命なのだ。

アメリカ大統領の「拒否権」を行使してしまふ。議案が法案を通して、大統領が署名を拒否すれば、法律にはならない。それをくつがえすには、もう一回三分の二の議決が必要である。参院野党は、気がついてみたら、その大統領なみの拒否権を手に入っていたわけだ。

これまで野党は、多勢に無勢、牛歩戦術や審議拒否ぐらしか、抵抗の手段がなかった。ところが今度は、立場が逆転。この法案を通していただけませんか、自民党が頭を下げなければならぬ。

そこで金丸さんあたりが、作戦を立てているらしい。野党の一角を切り崩し、あわよくば自民党の別動隊にしてしまおう。公明党、民社党なんか、どうかなあ。

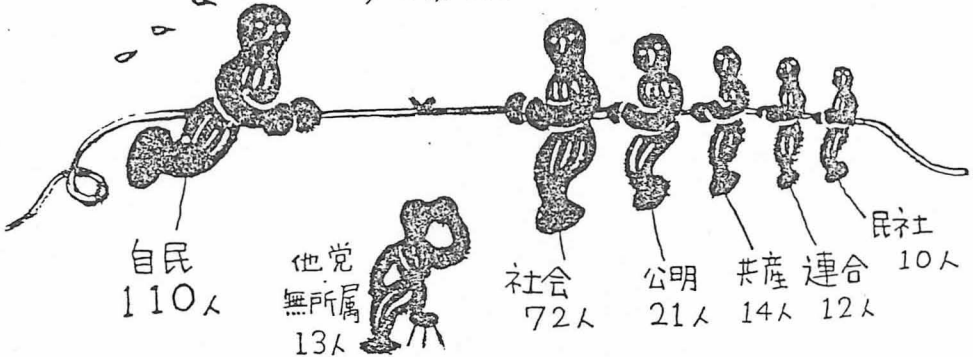
飯に公明党と自民党が組めば、ねじれ現象は「死で解消する。そこで自民党も、うんとよい条件を出さうとす。連立が成立してもおかしくないケースだ。

ただ野党も、うかうかと自民党の誘いに乗ると、つぎの選挙がこわい。自民党の消費税に、どうしてまじめに反対しなかつた、なんて言われたらどうしよう。見直しても、戻してタメてそのまゝ

社会党はじめ、野党は「もって」消費税廃止を叫び、選挙を闘った。自民党も消費税の「見直し」を公約した。現状はタメという点で、与野党は一致している。

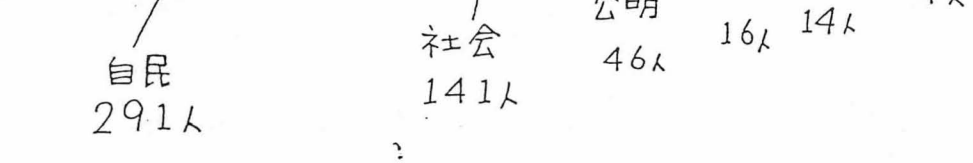
皮肉なことに、かえってそれで、消費税が生き延びてうである。野党の廃止法案が、参院を通過して衆院に、自民党の見直し案も、衆院を通過して参院に。ところがそのあと、どちらも否決されて、「相討ち」の廃案。結局もとの消費税のまま、という操も濃厚である。

参議院



いままではその財源を、主に所得税に頼っていた。所得税は累進課税だから、所得のある人ほど税金を多めに負担する。合理的で公平な制度と言っている。でもあんまりそれに頼りすぎて、中高年のサラリーマン層に負担が集中、子供の学費や住宅ローンも重なって、すっかりへばっている。新入社員やOLのほうは、身元保証とくうぐらいて、まだ余裕がある。そこで消費税みたい

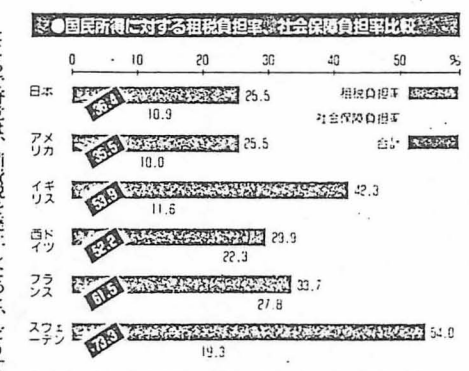
衆議院



。金持ち税源だとよく言われる。でもそんなことはなくて、取るべきところからちゃんと取れるのが消費税。しかも所得税とペアで、不公平をなくす切札にもなる。クロコントーソーサンは、もう御免

注:衆議院・参議院の政党内閣構成議員数の内訳。両院とも数字は、'90年2月19日の時点でのもの。衆議院の無所属他の議員6名分については当該集票部の判断で与野党に分類した。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 専攻は社会学。「冒険としての社会学」(毎日新聞社)などの著者。今年6月発売の、岩波「哲学の冒険」第4巻に「性愛のポリティクス」が載っている。……税は民主主義の血液。金持ちからとればいいというような、がさつな発想では困ります。



ところで野党は、消費税を廃止したあと、どうするつもりなんだろう。どうももうひとつ、備切れが悪い。こり押しして消費税を導入した自民党はいけないが、それまでの税制(所得税を軸に、物産税など)のままでは、いざ行きたがるものも確かだ。

消費税って、そもそも何なのか。どの税制がいいか、最後に選ぶのは国民である。だが、自分の負担ばかり考え、消費税をよくわかってない人も多々いた。でも、もういちどじっくり、考え直さう。

まず消費税の目的だが、政府の「税制改革大綱」によると、①高齢化社会に備え、②不公平税制をなくし、③所得・消費・財産に、バランスよく税金をかけるためである。という。けつこうな話だ。

じゃ、消費税なら、それがうまくいくのか。税金はそもそも、政府が国民のために仕事をするのにどうしても必要なもの。たとえば、社会福祉にだってお金がかかる。それを国民が負担するわけだ。

消費税はもとより、E.C.各国の税務省が、脱税追討に考えついたもの。取引のたびに伝票を切って、順に税金(付加価値税)を上乗せしていく。最後にそれを払うのは消費者だけ。それまでの取引が全部ガラス張りになる。個人事業主や企業から、所得税・法人税をきっちり徴収できる仕組みになっている。ついでに納税者身分も取り入れれば、キャピタルゲイン(株売却の利益など)ももたらすキヤッチ、じつに公平だ。

お手本はこうなのに、自民党の消費税は、肝腎のここが竹藪。伝票なしの、帳簿式なのである。おまけに、簡易課税制度といって、年間売上上げ五百万円以下の企業には、はいたいこの位だろうと、どんぶり勘定で税額を決める。消費者からあつた3%の消費税をネコババしてください、みたいな困った制度である。

わじれ国会の今、政治改革の絶好のチャンス。だから野党も、そろそろ作戦を変えなう方がいい。いろいろ考えてみて、消費税は、公平・簡素(例外がなくてわかりやすい)・中立(物産税みたいなアンバランスを生まない)と、三拍子そろった税制のもの。野党のやりたい社会福祉を進める財源としても、負担はすた。野党の消費税廃止論は、あまりにうしろ向き。もっと前向きにならう。自民党のインチキ消費税のかわりに、ぐんと本格的な消費税に修正したらいいんじゃないか。

今、野党の責任は重い。自民党を頼とほして、本気で政権をとる気なら、財源(税金)の裏づけも考えた。現実的な政策をじゃんじゃん打ち出さないとだめだ。衆参ねじれ国会の今、絶好のチャンスである。参議院では多数派なんだから、野党主導で、国民のために必要な法案をどんどん作らう。土地問題、農業問題...課題はいくらもある。野党もやるじゃないかと国民をうならせて、信頼をえよう。型どおりの国会審議なんかやめて、「朝まで生テレビ」みたいな徹夜討論もやってみよう。とにかく野党が、自民党のライバルに成長しないと、政治はよくならない。消費税とねじれ国会、戦後民主主義の真価が問われる止念場がやって来た。

とうとうベルリンの壁も崩れて 蘇る不死鳥ドイツが世界をリードする

文橋爪大三郎

ドイツといえば、科学の国。アインシュタインが「相対性理論」を発表して、世界をアッとさせたのは一九〇五年。彼はドイツの科学者である。そういえば、X線のレントゲン博士も、結核菌を発見したコッホ博士も、量子力学のプランク博士も、V2号ロケットのフォン・ブrawn博士も、みんなドイツの学者たちである。

二、世紀の前半、ドイツの科学技術は世界のトップレベルだった。一九三三年までのノーベル賞獲得数(文学・平和賞を除く)は断トツ一位の三十四。ダイムラー・ベンツやシーメンス、クルップなど、品質のよい工業製品を作る大企業も、国内にひしめいていた。

こんなドイツが、どうして何十年も、ベルリンの壁で東西に分断させられていたのだろうか。

ドイツ人は几帳面で働き、集団規律もよく守る。戦争にもメカにもモロ強い。ほつておくと、主導権を奪われてしまうと、周りの民族に相対視されている。

ドイツは水田間、沢山の小国(領邦)に分かれて、発展が遅れていた。それをやまと統一、ドイツ帝国を成立させたのが、プロシエンの宰相ビスマルク(1815)。余勢を駆ってバルカン半島に勢力をのびせるとしたら、第一次世界大戦(1914)が起ってしまった。

なぜヒトラーが登場したのか。この戦争、人類が有史以来使ったと同じ量の火薬をいちどに使ったと言われるほどすさまじい戦争だった。英、仏、ロシアを敵にまわしたドイツは、ついに屈辱、屈辱的なヴェルサイユ条約に調印する。

この条約で、ドイツは領土をかなり削られた。おまけに巨額の賠償金を課せられる。イギリスの代表ケイプスは、無茶だと反対したが、大勢に押し切られてしまう。おかげでドイツ経済は大打撃を受け、不満の声が渦巻いた。追い打ちをかけるように、大恐慌(1929)がドイツを直撃、街々は大雪で覆われて、そこに暴徒が横行した

のが、アドルフ・ヒトラーを先頭とするナチスである。ナチスは、ならず者を集めて「突撃隊」をつくった。これが暴れ回って反対党を蹴ちらし、総選挙(1933)で第一党に躍進。ヒトラーも全額的首相に就任した。

ヒトラーがまず手掛けたのは、景気対策の土木事業。アウトバーン(高速道路)をばんばん建設、再軍備もすすめた。景気が上向いてたちまち失業者がいなくなつた。ケインズ政策(公共事業で景気をよくする)に、世界で最初に成功したのは彼である。

ナチスは正式には「国家社会主義ドイツ労働者党」という。週末には海水浴、ワンダーフォーゲルと、労働者の人気とりもする。ベルリン・オリンピック(1936)も大成功。ドイツ人はようやく自信を取り戻した。

盛り返した国力と軍備を背景に、ヒトラーは外国を脅して、「もともとのドイツ領」をつぎつぎ奪い返した。ドイツ人は拍手喝采、ここで引退したならヒトラーは、偉大な政治家といふことになっていただかもしれない。

だが、ナチスは正体を現す。スターリンのソ連と示し合わせ、一九三九年九月、突然ポーランドを侵略。驚いた英仏がドイツに宣戦布告すると、得意の電撃作戦でフランスを降伏させてしまう。ヨーロッパの大部分がたちまちドイツの手に落ちた。

でも、調子に乗ったヒトラーが、ソ連に攻めこんで手こずっている間に、気がついたら形勢が逆転、次第に敗色が濃くなる。一九四五年にはヒトラーが自殺、ドイツも全面降伏した。

テヘン全線崩壊のかけひき。それに先立一九四三年、テヘランで米英ソの三巨頭が会談した。連合軍はここに上陸すべきか。チャーチルはバルカン半島を提案したが、お人好しのルーズベルトがホルマンデー(フランス)上陸をOKしてしまふ。これこそスターリンの思いつき、ソ連は東ヨーロッパ諸国を解放し、ヤサヤと支配下ににおさめた。東欧が分裂してしまおう。いつわらざる本音である。

でもおかげで、ヨーロッパは鉄のカーテンでまっふたつ、かつての繁華はいまもいず。その隙をついて、日本が経済大国のしあがってくる。これはまずいと、ヨーロッパはEC統合を進めることにした。

その矢先に思いがけない、東欧の民主化である。東西ドイツの統一も、一挙に話がまとまった。

これでドイツの国力は、ぐんと上向きになる。それにつられて、ヨーロッパ全体が活気づくだろう。そこを見越して世界中から資金が殺到、ドイツブームに沸いてい

る。あべこべに日本からは資金が流出、トリプル安になっている。ドイツ統一のあと、世界はどっちに進むか。

東西ドイツ全体で、ドイツは昔みたいに大きくなる。おまけに、ここ十年ぐらいは、かつての日本みたいな高度経済成長が期待できる。

東ドイツをみないな「貧しい」国を背負いこんで、西ドイツは大変だろうという声をきく。でもそれは違う。西ドイツは、資本も技術もあり余っているから、労働力が極端に不足している。統一後はその必要がなくなる。人が出稼ぎに来ている。統一後はその必要がなくなる。しかも相手は同じドイツ人で、教育も高いから、外国人労働者問題の心配がない。行無相通じるとはこのことだ。

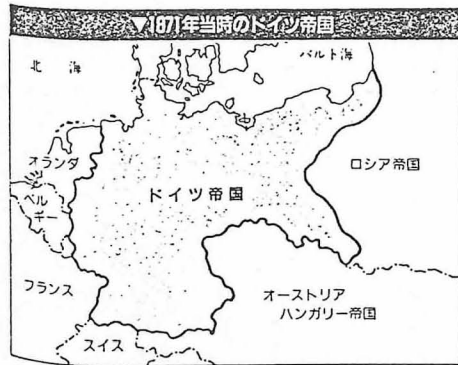
もっとも、しばらくの間、東ドイツは大変だろう。この五月、統一のための経済協定がまとまった。懸案の両国マルク交換比率は、1:1。東独国民は貯蓄通帳を眺めてひと安心。実勢レートだと、東独マルクは西独マルクの数分の一だから、これは大サービスである。

けれども、この比率だと資金が高すぎて、東独企業の大半は赤字。たちまち倒産するはずだ。百万人以上の失業者が出る、とも言われている。ナチスが出てきた頃みたいに、職を求め人びとが街にあふれそろうだ。

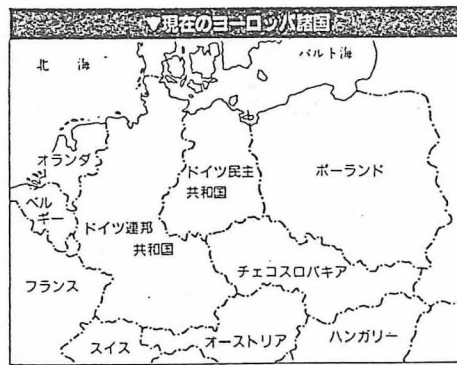
そこで、西ドイツが最新の工場を、東ドイツにじゃんじゃん建てる。公共事業もどんどんやる。輸出にも力を入れる。そうすれば1:1.5年で、失業者なんかいなくなる。経済も見違えるように順調になるはずだ。膨大な需要と、投資のチャンスが降って湧いたわけで、西ドイツにもおいしい話。しかもドイツは信用があるから、世界中からいくらでも資金が借りられる。

こうしてドイツが好況になれば、フランスやイギリスも、おぼろげに景気がよくなる。東欧諸国も、東ドイツの真似をして成長できるかも。そして、ソ連、ソ連がベルリンの壁を崩した本音のねらいは、自分もヨーロッパに入れてもらいたい、ということなのだ。

ドイツはNATOにとどまり、間違っても核武装なんかしてはいけぬ。こうしてヨーロッパに平和と安定が訪れば、アメリカだって軍備の負担がなすむ。平和で豊かなドイツが現れることは、世界中の国から歓迎されている。日本もドイツを見習って、アジアや世界の国に喜んでもらえるように行動していこう。



1871年当時のドイツ帝国

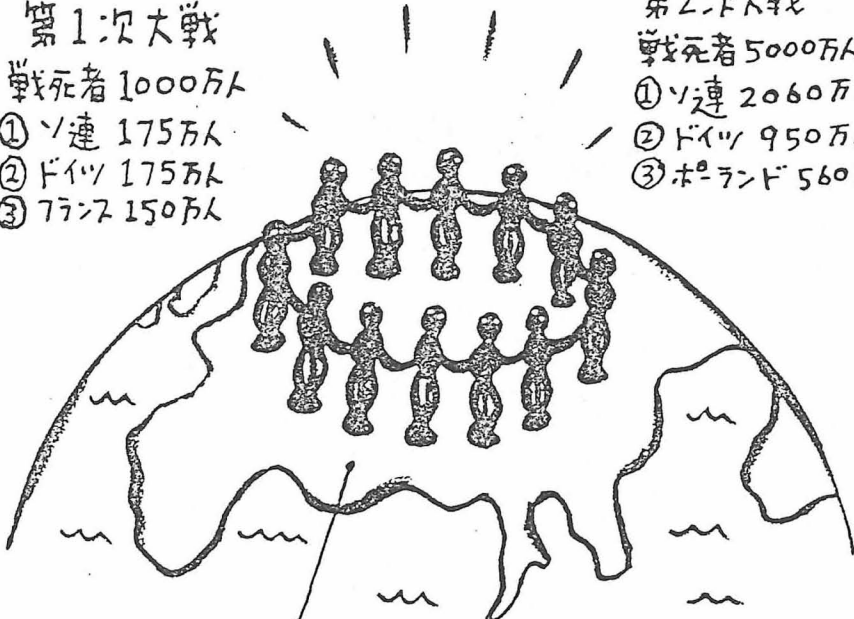


現在のヨーロッパ諸国



第1次大戦
戦死者1000万人
①ソ連 175万人
②ドイツ 175万人
③フランス 150万人

第2次大戦
戦死者5000万人
①ソ連 2060万人
②ドイツ 950万人
③オランダ 560万人



EUROPE

EC=ヨーロッパ共同体(European Community)の加盟国は、仏、西独、伊、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、英国、アイルランド、デンマーク、ギリシャ、スペイン、ポルトガルの12か国。
EC域内の統合市場の実現で、国境をこえたひとつのヨーロッパ社会へまた1歩近づくと。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 専攻は社会学、「冒険としての社会学」(毎日新聞社)などの著者。今年6月発売の、岩波「現代哲学の冒険」第4巻に「性愛のポリティクス」が載っている。



男も女も結婚難、あせってもダメ いい男性の見つけ方、教えます

文・橋爪大三郎

「ル・クル」第2巻第9号 pp.162-163
学習研究社 (1990年9月号)

3月5日、マリコ・ショックが、日本中を駆けめぐった。作家の林真理子さん(35)が、婚約を発表したのだ。「ルンルンを買ってお家に帰ろう」で読者の心を掴んで以来、林さんは、若い女性のオビエノン・リーダー。しかも、「結婚したい」と率直な本音を隠さない。とうとうお見合いで、ハンサムな、エリート技術師東郷さん(40)を射止めた。5月18日には念願の挙式、夢にまで見た逆転満塁ホームランだ。上野千鶴子さんも、かつていた「三五歳過ぎた(結婚経験のない)女性が将来結婚することば、ほほあり得ない」って、それを真事にはねかえしたのだから立派。私もそれに倣うと、勇気づけられた女性が何万人いたことだろう。

仕事を続けたい。でも結婚はしたい。働く女性なら誰でも抱えるこの悩みを、今回は一緒に考えよう。

●「男あまり」はワソカ本当か
結婚といっても、相手がいなければ話にならない。ところが、周りを見回しても、いい男がいらない。ただ、独身の〇しに質問すると、たいがい「職場にこれはという男性がいなくて」という返事がかえってくる。それにしては、恋愛結婚の約半分が職場結婚というデータもあるのだが、ふつうに働いている限り、出逢いのチャンスが少ないのは確か。

でも男性だって、悩みは同じだ。いや、もっと深刻かもしれない。「男あまりの結婚難」と言っではなにか。

●アルトマン「結婚白書」の一九八八年版が「適齢期の未婚女性：は約55万人が余剰」というショッキングな数字を抱けた。これが、結婚できないであふれた大変という男性の側の危機感をあおり立てた。

計算の仕方にもよるけれど、確かに「男あまり」の傾向はある。もともと男子のほうが少し多く生まれるうえに、女性のほうが平均2・6歳早く結婚する。だから単純に25〜34歳の未婚男女の人数を比べてみると、ほぼ2・1、男性が二〇万人も多くなる。

ところが、そんなに「男あまり」じゃない、というデータもある。たとえば20〜24歳の年齢層の未婚男女では、一九七〇年頃のほうがずっと男性過剰だった。年齢差を3歳つけ、女性20〜24歳、男性23〜27歳で比べると、最近はずっと、あべこべに女性のほうが25万人も多くなっている。

●「適齢期」の問題もある。女性の結婚は、25歳前後の数年前に集中している。26〜29歳の独身〇し人のアンケートでは、同性の友人が結婚すると「あせる」が43%、うれしい」の33%より多くて、笑いごとでない。

いっぽう男性は、20代半ばから30代前半にかけて結婚できればいいや、というんびりバタタン。女性みたいな適齢期の意識はないと言っている。

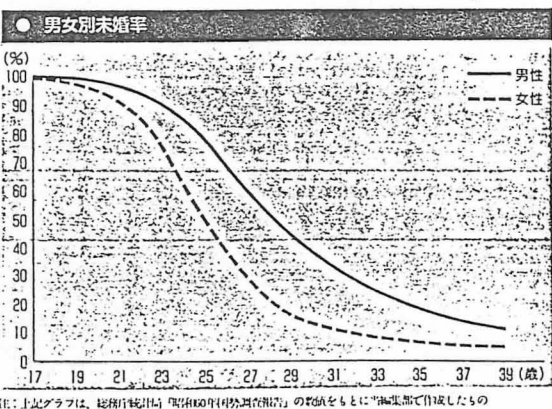
●「男性選択の自由アハハ」
人数などでみるかぎり、だから、最近急に結婚難になったわけじゃない。それでも結婚がむずかしく思えるのは、女性をとりまく社会環境ががらりと変化したから。戦後すぐは、見合い結婚が主流だった。地元、親の勧めの相手に、二十歳そこそこで嫁入りした。

ところが、70年代あたりを境に、女性の高学歴化、社会進出が進む。いっぽう、昔ながらの仲人おぼろみみたいな地元のネットワークが、影をひそめる。女性も自力で、相手を選択する時代になった。

●教育があり仕事をもった女性は、どんどん結婚難になっている。初婚の平均年齢が25・8歳。世界で「二を争う高さだ。収入も増え、男性を見る目も肥えて、何かなんでも結婚というとはなくなった。「オールド・ミス」も死語になって、いまは「シングル」という。

ただ、ほとんどの女性は、いくらか仕事で面白くても、「いい人がいた」といつかは結婚したいナ、と思っている。結婚する割合が高いのも、日本の特徴だ。

●「いい男」とはどんな男性か
アッシー君、ミツク君、キープ君と、目的別に男性を



注：上記グラフは、総務省統計局「国民生活基礎調査」のデータを基に作成したものである。

●この二十代後半が、実は、女性にいちばん厳しい年代なのだ。結婚すると決めた相手のいる人はまあいい。そうでない女性は、30歳をひとつの目安に、このまま仕事を続けていったらいいか、それとも転職しようか留學しようか、お見合いでもなんでもして、とにかく結婚しようかと、思いは千々に乱れる。

いざ結婚しようにも、ちょっとびびったりの相手が見当たらない。

●「男あまり」はワソカ本当か
たらない。せいたくを言っているつもりはないんだけど、どうしてかしら。

この年代の女性は、世の中を知っている、男性を見る目も肥えている。だから、ちょっとどうかと思う男性は迷わずパスする。それに、結婚したとたん、収入も自由もなくなりそう。二の足を踏んでしまいがち。万が一仕事もあつて、仕事も続けたいと言ってくれて、性格や趣味もびびったりのヒトがいるというの。

●ところが、せめてその半分程度の理解ある男性すら、なかなか見つからないのが実情だ。

●男女差の大きい職業
20代後半の女性の、相手は順当ならだいたい30歳少し過ぎの男性。だが彼らの大部分は、世の中の変化をわかっていなくて、たいそう保守的な女性観を持っている。

●まずこの年代の男性は、とっても忙しい。だから地味な主婦ですんなり家庭に収まり、みそ汁をつくって待つているやさしいお母さん、みないな女性を求めてしまっ。いまだこんな女性がいたら、お目にかかりたい。

●30〜34歳の男性の未婚率は、このところ急上昇。なんと30%に近い。だから、これから結婚しようという読者の皆さんには、宝の山のはずである。

●この年代の男性は、青年実業家とか、医師、弁護士みたいな連中は、20代後半を飛び越して、しこのうささいことを言わないもって若いギャルを選ぶ割合が多い。お嬢さまやボディコン娘が選り好みで、彼らは、肩書や年収にめっぽう弱いのだ。

●つづきにこの年代には、いままでの女性に敬遠されがちなタイプ男性がけっこう売れ残っている。農家の長男だから、学歴が高くない、仕事が地味だから、……と気の毒な理由で結婚を心待ちにしている人ひとも多い。

●さらに、少々難あり組もまじっている。別離れできないマザコン男性、ホモの男性、オタク族、……。初対面だとなかなか判らない場合もあるから、ご用心。

●あとは、チャンスはなかった男性たち。ディスコにいかないと試験管とにらめっこしていた、みないな堅物タイプだ。当然、世間のことには疎い。こういう男性の面白味はわかるまでには、よほどの忍耐が必要である。

●「男あまり」はワソカ本当か
たらない。せいたくを言っているつもりはないんだけど、どうしてかしら。

この年代の女性は、世の中を知っている、男性を見る目も肥えている。だから、ちょっとどうかと思う男性は迷わずパスする。それに、結婚したとたん、収入も自由もなくなりそう。二の足を踏んでしまいがち。万が一仕事もあつて、仕事も続けたいと言ってくれて、性格や趣味もびびったりのヒトがいるというの。

●ところが、せめてその半分程度の理解ある男性すら、なかなか見つからないのが実情だ。

●まずこの年代の男性は、とっても忙しい。だから地味な主婦ですんなり家庭に収まり、みそ汁をつくって待つているやさしいお母さん、みないな女性を求めてしまっ。いまだこんな女性がいたら、お目にかかりたい。

●30〜34歳の男性の未婚率は、このところ急上昇。なんと30%に近い。だから、これから結婚しようという読者の皆さんには、宝の山のはずである。

●この年代の男性は、青年実業家とか、医師、弁護士みたいな連中は、20代後半を飛び越して、しこのうささいことを言わないもって若いギャルを選ぶ割合が多い。お嬢さまやボディコン娘が選り好みで、彼らは、肩書や年収にめっぽう弱いのだ。

●つづきにこの年代には、いままでの女性に敬遠されがちなタイプ男性がけっこう売れ残っている。農家の長男だから、学歴が高くない、仕事が地味だから、……と気の毒な理由で結婚を心待ちにしている人ひとも多い。

●さらに、少々難あり組もまじっている。別離れできないマザコン男性、ホモの男性、オタク族、……。初対面だとなかなか判らない場合もあるから、ご用心。

●あとは、チャンスはなかった男性たち。ディスコにいかないと試験管とにらめっこしていた、みないな堅物タイプだ。当然、世間のことには疎い。こういう男性の面白味はわかるまでには、よほどの忍耐が必要である。

年齢28.8才
(4〜5才年上がいい)

年収422.8万円



▲ 26歳女性の配偶者像
注：理想像の数字は、(社)民間調査及び「アルトマン結婚白書」による資料をもとに作成している。実像の数字については「結婚の平均外見調査報告」(総務省)、「理想恋愛調査」(学研)、「結婚統計からみた結婚意向の実態」(同)、「結婚」などの調査を参照した。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 社会学者。著書に「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)など。……先ごろ、執筆アシスタントなるものを募集しました。15名の女性と面接しました。皆さんの前向きな生き方に感動。そして、企業は女性の力を引き出すのがなんて下手くそ、と実感しました。

●いまからでも間に合う、傾向と対策
そういう男性がいるいっぽう、女性側の選択も一部に集中、希望どおりの結婚ができる女性数は少ない。これをかいくるには、他人と違った、自分だけの価値観をしっかりと持つ。これが決め手だ。そうすれば、ほかの女性の目に石炭でも、私にはダイヤモンド、という揺り出し物の男性を必ず発見できるはずである。

●20代後半のあなたなら、こういう作戦もいい。まず、年下の男性にも目を向けよう。彼らは同年代の女の子の気まぐれにふり回され、いい加減うんざりしている。そんなとき、あなたの大人の魅力(十経済力)に、コロリと参るかもしれない。

●林真理子さんの真似をして、40歳辺りの男性も悪くない。さもなくば同年代の、引つ込み漁家の男性を、こつちから口説いてしまおう。あと、自分も相手に選ばれるのだから、日々自分をみがくことをお忘れなく。

●どうしても結婚しないと、という揺りはケガのもと。そして、年齢のこともしばらく忘れよう。そうすれば、あなたには、ぐんとチャンスが広がります。

38度線もなくなつちやうの？ どうなる朝鮮半島、大胆予測！

文・橋爪大三郎

金賢姫。またの名を、マ・ユ・シ。彼女はいまソウルで、反省の日々を送っている。87年11月、115人の乗客乗員とともに大韓航空機が消息を断つたあと、金賢姫は逮捕された。そして、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の工作員(スパイ)だと自白した。韓国側の発表によると、彼女らの仕掛けた爆弾で、同機は一時のうちにバラバラになったという。いったいどうして、こんな事件が起こったのか。知られざる韓国、朝鮮民族の悲劇を、今日は考えてみよう。

もある。日本が建設した水電ダムや工場なども、北に立地していた。いつか南は没後地帯。水田が青々と広がっている。北は工業、南は農業。学校ではそう習った。でも最近、韓国の工業力も大したもの。造船でも自動車でも、電気製品でも、うかうかしてはいられない。都市に生まれ変わった。政治の面でも、李承晩-朴正熙-金正煥と続いた独裁政権の時代が終わり、民主的な選挙で選ばれた憲法制定が誕生している。ソウル・オリンピックも成功。韓国は先進国に仲間入りをした。じゃあ、北朝鮮はどうか。外国に門戸を開きしている。詳しいことはわからないが、あまり願望でないらしい。いや、かなりピンチという話もある。

分製国家の苦しみ
北緯38度線。この一本の線が半世紀近く、一つの民族を南北にひき裂いている。

ないないづくしの北朝鮮経済
朝鮮労働党の金日成主席は、政権につくと、まっすぐスターリン型の計画経済を採用した。そして、党内で独裁的な地位を固めていく。毛沢東思想の向こうをきいた「主体思想(マルクス主義を朝鮮に合わせて発展させた「独自の」な思想)」を唱え、ソ連とも中国とも距離を置いた独自の社会主義路線を行く。その結果、農業も工業も大発展。「世界中がうらやむ楽園」になった、ということになっている。

忘れてならないのが、日本にいた韓国・朝鮮の人々である。とぼつちりて知られず、おまけに祖国も分裂してしまい、在日本朝鮮人総連合会(総連)、在日本大韓民国居民団(民団)という二つの組織に分かれて、対立するようになった。

ところが、北朝鮮に里帰りした朝鮮総連の人びとは、みんな、祖国のあまりの貧しさにびびりて帰って行く。北朝鮮の農業も工業も、政府の発表とらばらら、どん底の状態らしい。たとえば
●山の水を切り倒し、田中に段々畑をこしらえたため、毎年のように洪水が発生。大きな被害が出ている。
●肥料も技術も足りない。米などの主食が不作。人びとはトウモロコシのオカユで飢えをしのいでいる。
●石油化学工業がないから、プラスチックもない。
●コークスが作れないので、純度の高い鉄や、合金ができない。釘や針金や、いろいろな機械も作れない。

北は工業国、南は農業国……？
さて、朝鮮戦争のあと、38度線(軍事分界ライン)の北は社会主義体制、南は自由主義体制のもと、国づくりにもついに分かれた。

東ドイツは、曲がりなりにも工業国で、トラバントという自動車だつて生産している。中国だって、国民にいわれた自給自足の生産でいい。でも半壊には、北京や上海みたいな、朝の自給車ラッシュがない。自給車を作るだけの工業力がないのだ！
そこで、主な工業製品は、外国から買うしかない。輸出できるものなんて、ほとんどないから、当然買手が不足する。金賢姫の父親のスパイ、「蜂谷貞一」。身分は

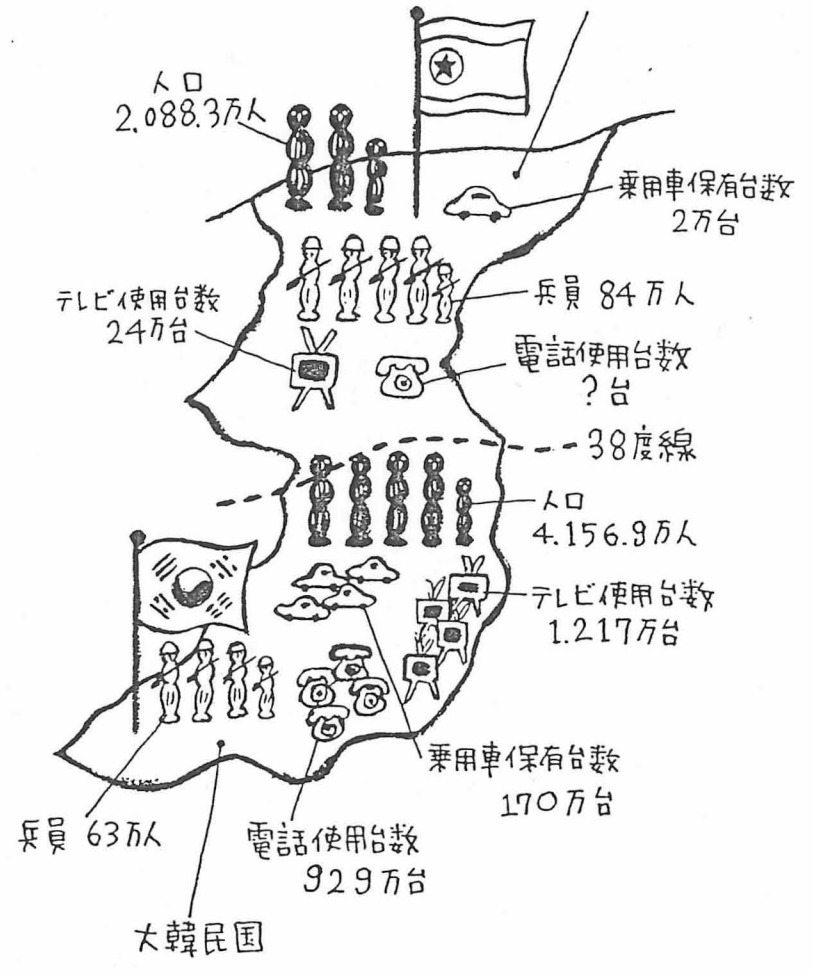
外交官だったが、闇ドル市場で外貨をかき集め、本国に送金するのが仕事だったというから情ない。

ソ連が見放したルーミアニアのチャウシエスク政権は、あつとやうにひっくり返った。東ドイツも崩壊した。こんどは北朝鮮かと、世界の注目が集まっている。ソ連が長年テコ入れしてきた軍事力をのぞけば、北朝鮮の国力は、韓国に遠く及ばない。もっと問題なのは、北朝鮮の政府が、この事実を国民にちつとも知らせていないことである。金賢姫もソウルで目をパチクリ、今まで教えられていたのは嘘だったと、やっと気付いた。

こういふ状態になったら、「主体思想」「主体技術」はちよつとお預け、外国の技術や資本をとり入れて、経済の立て直しをはかるのが本当だ。だがそれだと、金日成主席のメンツがまるつぶれ。そこで、国民を叱咤激励し、海軍戦術で乗り切ろうとしている。そして、主体思想塔とか百層階建てのホテルとか、韓国に對抗してはかてない建造物を見て、資源をむだづかいしている。息子の金正日氏が後継者になったところをみると、この体制をずっと続けるつもりらしい。権力の「世襲」?! と、ソ連も

中国もあきれている。
国民は知らなくても、政府や軍のひとり握りのエリート

朝鮮民主主義人民共和国



▲ 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国の人口他との対比
注：上記「大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国の人口他との対比」は二宮書店「世界国要覧1990年版」により、(ただし、朝鮮民主主義人民共和国の車及び電話の使用台数については、韓国国土院一院の資料中の推定値を引用している)当編集部で作成したイラストグラフである。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 社会学者。はじめての構造主義(講談社)冒険としての社会科学(毎日新聞社)などの著書がある。……去年は中国に関心が集まりましたが、朝鮮半島にも間もなく大きな動きがあるはず。日本人はアジアのことを、知らなすぎます。

は、真実を知っているはずだ。そして、このままでは北朝鮮の将来が危ない、危機感をいだいているはずだ。その危機感に近い打ちをかける出来事があった。韓国の盧泰愚大統領が、ゴルバチョフ大統領と会談したのだ。韓国とソ連の国交樹立も間近。プッシュ大統領もこれを強力に後押ししている。

これは、何を意味するか。北朝鮮と韓国の戦いがおこつても、もうソ連は助けてくれない、ということだ。中国だって同じ。北朝鮮が自棄になって暴れたら、自滅である。
おまけに韓国は、8月の南北の「自由貿易を提案、追いつけ」をかけた。北朝鮮はいよいよ追いつめられた。

もうこうなれば、郭小平みたいな経済開放政策で、少しずつ国力を回復していくしかない。そこで金日成主席も、最近アメリカとの関係改善をはかっている。

ところが、経済開放に踏み切るには、いままでの考え方を百八十度変えないといけない。北朝鮮が「楽園」ではなくて、ただの後進国で、と認める。国民はショックで、大騒ぎになるだろう。こういう「まれれ、石は、金日成主席にしかできない、やるしかない」のだけれども、残された時間は少ない。

これをやらなければ、ソウル・オリンピックを妨害しよう、大韓航空機の爆撃を命じたらいいから、何がと出さずかわからない。流血の事態が起こるのではないかと、ソ連とアメリカも、中国も、心配している。鍵を握るのは、軍部だろう。ソ連とパイプを活かし、金日成に代わって開放路線を推しすすめることのできる人物をつつける。そして米ソでバックアップしていく。そんな相談が舞台裏に進んでいくかもしれない。ともあれ、なるべくなら、北朝鮮が国際社会にとけこんでいくというのだが、日本も、この流れをよく理解したうえで、「ミサ」という時には、きつなく経済援助ができるよう、準備をしておくべきだろう。今後、韓半島が予想されるアジア情勢。日本の責任も重い。そんな、知らなかつた、ではすみません。

ゴルバチョフ大統領、ご安心ください 北方領土問題は、これで解決です

文・橋爪大二郎

「ジャン、ジャン、ジャトーガイモ、サツマイモツ（軍艦マーチのメロディー）……」
「返せ、北方領土！」石炭の宣伝カーが、けたたましいボリュームで駆け抜けていく。こういうのは迷惑だけど、北方領土返還は国民の悲願。国会では何回も、全会一致の決議をしている。

その割りにさっぱり、北方領土は返って来ない。でも来年は、ゴルバチョフ大統領の訪日だ。この機会を逃すと、各方面で期待が高まっている。
何十年も進展がなかったのは、主張がまったく平行線だから。まず、双方の言い分をフォローしておく。
日本は、北方四島（歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島）を「固有の領土」と主張。ソ連にすぐ返せ、と要求している。いっぽうソ連は、これらの島々をロシア共相国の一部であるとし、「領土問題は解決済み」と、長いこと交渉に応じなかった。

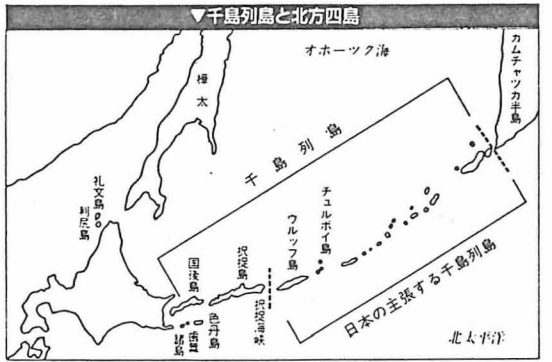
主張がこんなに違うのでは、なまじのことで「解決」は無理。どっちの主張にどんな根拠があるのか、歴史をさかのぼって検証してみよう。

●北方領土問題の歴史をふり返る。
北海道から千島、樺太にかけては、もともとアイヌ民族が住んでいた。そこへ毛皮を求めて、ロシア人がやって来て、千島列島を探検。あちこちに定住した。日本では松前藩が、国後、択捉を勢力下に収めた。そして、鎖国も解けた一八五五年に、幕府は「日露通交条約」を結ぶ。この条約で、国後、択捉は日本領、この千島列島はロシア領、と定められた（歯舞諸島、色丹島は北海道の一部で、当然日本領である）。
樺太（サハリン島）は、日本領かロシア領か話し合いがつかなかった。どちらでもない「混住の地」昔はそんな奇妙なもがあった。ということになった。でもロシアはあとで、どうしても樺太が欲しいと、言い出し、相談の結果、千島と交換することになった。これが一八七五

年の「樺太千島交換条約」である。この結果、樺太はロシア領、千島列島は全部日本領ということになった。
このあと、日本とロシアの関係は悪化していく。一九〇四年に日露戦争が勃発。翌年のポーツダム条約で、日本は樺太の南半分を手に入れた。すっかり軍国主義になった日本は、ロシア革命に干渉してシベリアに出兵したり、国境で挑発（フモンハン事件）をしかけたりした。
●日本は、千島を放棄した
戦争が終わった。平和条約を結ぶ。その平和条約では、あともめないよう。国境をはっきり決めろ。これが、国際法の常識なので、頭に入れておこう。

一九四五年、日本はポーツダム宣言を受諾。連合国に無条件降伏した。ポーツダム宣言には、「日本国ノ主権ハ、本州、北海道、九州及四国並びニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルベシ」と書かれている。だから、本土とその周りの小さな島々だけが、日本領ということになった。そして結ばれたのが、サンフランシスコ条約（一九五一年）。これは、「日本国は、千島列島並びに……樺太の一部……に對するすべての権利……を放棄する」とある。つまり日本は、今までの侵略的な態度を反省し、千島列島はもう要りません、と宣言したのだ。これは、世界中の国々に対する約束だから、守らないわけにはいかない。

ところがこのサンフランシスコ平和条約に、ソ連は調印しなかった。なぜか土壇場でしぶったのだ。
ソ連は終戦直前の八月八日、アメリカなど連合国の要請をうけ、日ソ中支条約を破棄して日本に宣戦を布告。そして、国後、択捉など千島列島全部と、歯舞諸島、色丹島を主張した。
米英はこれを、黙認した。なぜかというところ、マルタ協定で、「千島列島はソ連に引き渡される」と決まっていたから。連合国は「領土不拡大」その国のものもどとの領土と認めない）を宣言していたのに、これはすこし変だが、ソ連を参戦させる見かえりとして仕方ない。



▼千島列島と北方四島
注：上記地図は、歯舞諸島と色丹島、また、参考として、和歌山県北方領土問題を考える会が作成。資料、外務省大田官報館提供。資料の北方領土、1990.2.25.高野雄「日本領土」東京大学出版会1982年

●二島返還と、四島返還、どこがちがう

とにかく千島列島は、日本のものでなくなった。でも、歯舞、色丹は違う。この二島は、もともと北海道の一部で、千島列島じゃないから、これは、サンフランシスコ条約を結ぶ際、アメリカも念を押して確認している。
実は歯舞、色丹の二島、もうちょっとで返って来るところだった。
一九五五年、ソ連と平和条約を結ぶため、鳩山内閣は松本大権を交渉にあたらせた。するとソ連は、歯舞、色丹の二島を返還してもいいという譲歩案を示した。松本大権は喜んだが、外務省は、それなら国後、択捉も取れるかもしれない、四島返還に要求をエスカレート、話し合いはすっぱりこじれてしまう。結局、平和条約は結



1792 in Japan

▲1792年ロシア人、ラクスマンが初めて日本に上陸

橋爪大二郎(はしづめ たいさぶろう) 社会学者。「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)などの著書がある。……サンフランシスコ条約は、戦後の日本を国際社会に受け入れた条約です。北方領土を考えると、この条約が基本になります。

でも四島となると、ウンと、言いにくい。ソ連はあちこちで国境問題を抱えていて、日本にだけ妙な譲歩はできないから。
「粘り強く」要求していれば、そのうち北方領土が返ってくる、というのが日本政府の態度。でも見方を変えてみる。「もともとの自分のものだから、返してくれ」という感情論では通らない。相手の主張や立場も考え、国際的にも通用する解決策を探らないと、何年たってもこのまんまである。買収はいい、という声もあるが、思い上がりもはなはだしい。
●もういちど、両国の主張を、じっくり比べてみる
日本……国後、択捉の両島は、ロシアとの条約で、平和的に日本領となった。連合国も、そういう領土は奪わないと約束していたはず。だから、日本のものです。
ソ連……日本は平和条約で、歯舞を含む千島列島を放棄した。それに、連合国のあいだでは、千島をソ連がもらう約束になっていた。だから、ソ連のものである。
どちらもそれなりに、もともとの領土である。だから、日本の言い分だけ、なんなり通るなんて考えるのはけし。世界は動いている。日本としても、妥協の道を真剣に考える時期にきた。
幸い、米ソの冷戦は終わって、ソ連原潜の隠れ家だったオホーツク海も、軍事的価値を失った。しかもソ連は、ベレストロイカを軌道に乗せるため、いま、日本の経済協力から手が出るほど欲しいはずだ。
●北方領土を、自由の島に
そこで提案だが、いっそ両国の主張を足して、で割り、国後、択捉の両島を、日ソどちらでもない「混住の地」にしたらどうだろう。両国は互いの主権を認めあひつたり自分の主権を放棄し、協力して両島の行政に当たるのである。もちろん、二島は非武装地帯とし、ぜひアメリカも巻き込んで、国際空港を建設してもらおう。日本人もソ連人も、ビザなしで行き来できる、自由の島だ。
国後、択捉は、もともと人口一万三千人の島。大した産業も、経済的価値もない。こんな島を依拠地になんて使おうよ、この際、南極みたいな、人類みんなが利用できる場所にする。関税をなしにすれば、香港みたいに大発展するかもしれない。そうやって、G.N.P.世界第二位、三位の日ソ両国が友好の絆を固めれば、どれだ世界にプラスになるだろう。
ゴルバチョフ大統領閣下、ぜひ真剣にお考え下さい。

イラスト：橋爪大二郎

株価は暴落、原油は高騰 深まる湾岸危機、戦争の瀬戸際へ

文・橋爪大三郎

「いやな奴が入ってくる……メソポタミアを支配する暴君……おそろるべきや、見通しは真暗」アラビアの海で大艦隊が待機しよう……いつも許されることになっていくノストラダムスの大予言が、またもや的中。フセイン大統領の命令で、百戦錬磨のイラク軍が八月二日、瞬く間に隣国クウェートを陥れた。

イラクのサダム・フセイン大統領は、ネフカドネサル二世(古代バビロンの繁栄を築いた大王)の再来を自称する。国内には独裁体制をしき、五千名の戦車部隊と百万の軍隊を擁している。でも8年に及んだイラン・イラク戦争で、経済は破綻寸前。だから石油収入で潤うクウェートは、餌えた狼の前の羊みたいなものだった。だが、勝手にその国を占領したらいけない。れっきとした国際法違反だ。これを許してなるものか。アメリカ、イギリスをはじめ、世界中が怒りに燃えた。

フセイン大統領の暴挙? というわけで、国連の安全保障理事会は、一致してイラク制裁決議。イラクの周りには、アメリカの空母5隻をはじめ、多国軍が展開している。経済封鎖でイラクからの石油輸出はゼロ。食料や生活物資の輸入もままならず、文字通り災のネズミだ。

ここでおおごとになるまいと、イラクは高をくくっていた面がある。イラン・イラク戦争では、クウェートをはじめアラブ世界が後押ししてくれた。ソ連も武器をわけてくれた。米ソの冷戦がゆるんだ際に、ちっぽけな隣国に攻めこんでも、誰もなんにも言わないだろう。ところが、読みは外れた。世界は米ソの協力を軸に、新しい平和の枠組みを模索しているところだった。その矢先に暴れ出したイラクは、平和への挑戦者。どの国もアメリカに協力する。頼みのアラブ諸国も及び腰で、完全に孤立してしまった。

中東は、世界でいちばん早く文明が開けたところ。そしていま、世界の矛盾の縮図である。宗教の争い、民族闘争の火薬庫、中東。興すのがわらわらである。オイル・ショック(第一次)が世界をみまひ、オイル・タラーが一世を風靡した。だが結局、アラブの近代化はうまくいかなかった。抜けがけで増産に走る国が現れ、値崩れしたのも一因である。イラン革命が起こって正政が倒れると、湾岸諸国は自分たちの政権が心配になった。その心配をえて、イラクはイランに戦争を仕掛ける(第二次オイル・ショック)。そして汎出の犠牲を出したのに、金持の湾岸諸国は最近冷

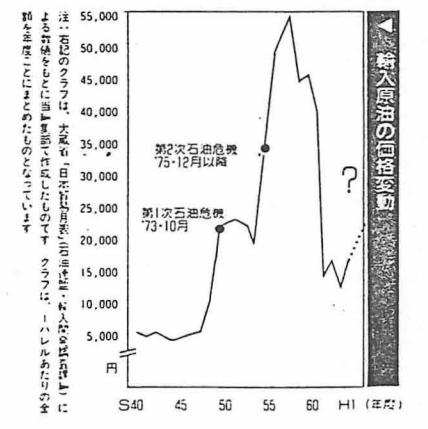
対立、産油国/非産油国の利害の不一致。これらがもつれた複雑なために、複雑に絡んでいる。順番にほかをいって、先行きが読めない。まず理解すべきは、イスラエルとアラブ諸国の、天敵ともいえる険悪な関係だ。

イスラエルは、世界をさまよったユダヤ人が、二千年ぶりに建てた赤願の国家だ。パレスチナの一角は、聖地でユダヤ人に約束されたという土地。第一次世界大戦に協力したお礼に、当時中東一帯を支配していたイギリスから、やっと独立のお墨付きをもらった。ところが、パレスチナの人びとに断りなされたため、話がこじれる。追い立てられたパレスチナ人は難民となって、PLO(パレスチナ解放機構)を結成。アラブ諸国の支援を受けて戦っている。いつほうイスラエルは、アメリカを後援に、圧倒的な軍力を持つ。アラブ諸国が東になってもかかわらない。過去4回の中東戦争で、イスラエルは一度も負けたことがない。

イスラエルが上層にかけられたエルサレムは、キリスト教の聖地だが、ユダヤ教にとっても神殿のあった大事な場所。おまけにイスラエル教の聖地でもある。この場所をめぐる争い、十字軍の昔から、もめごとが絶えなかった。それでも仲よく暮らしていた時期もあったのに、国家をつくる段になって、対立が抜きさしならなくなった。

イスラエル教は、一枚芝じゃない。イスラエル教も憎しという点では、足並みの揃うアラブ諸国だが、内部にいろいろな対立もかかっている。アラブ世界は、イスラエル教抜きに語れない。アラブ世界は、アラビア半島から興ったイスラエル教は、爆発的に世界に広まった。現在、東はフイリビン(ミンダナオ島)から西はモロッコまで、6億人もの人びとが信仰している。最大の宗派はスンニ派(九割の多数派)で、シーア派(イランなど)と対立している。それらがさらに、成律をめぐる争い、いくつもの宗派に分かれている。

たいではないかと、イラクは恨んでいる。欧米の常備は、通用しない。アラブ世界の人びとは、欧米と違った価値観をもっている。欧米の物差しで測り切れないよう、注意しよう。たとえば、ものを借りても返さない場合がある。必要なものは買つて当然、という考えなのである。だから、あべこべに気前のよい時はえらく、気前がよい。個人主義では、きびしい砂漠を生きていけない。国家なんていうのも、欧米人(キリスト教徒)の発明かもしれない。もともとイスラエル教徒は、信託を以て一つの共同体(ウンマ)というを作つて生活するのが本当だ、と考えている。だから、エジプトのナセル大統領



イスラエル教徒は、コーランの教えに従い、禁酒、毎日の礼拝、断食などの戒律(イスラム法)を守つて生活する。法律上のアドバイスを与える法学者(ホメイニ師みたいな人)が、人びとの尊敬を集めている。これを無視して強引に近代化を押し進めると、伝統に揺れという「イスラム原理主義」が出てくることになっている。

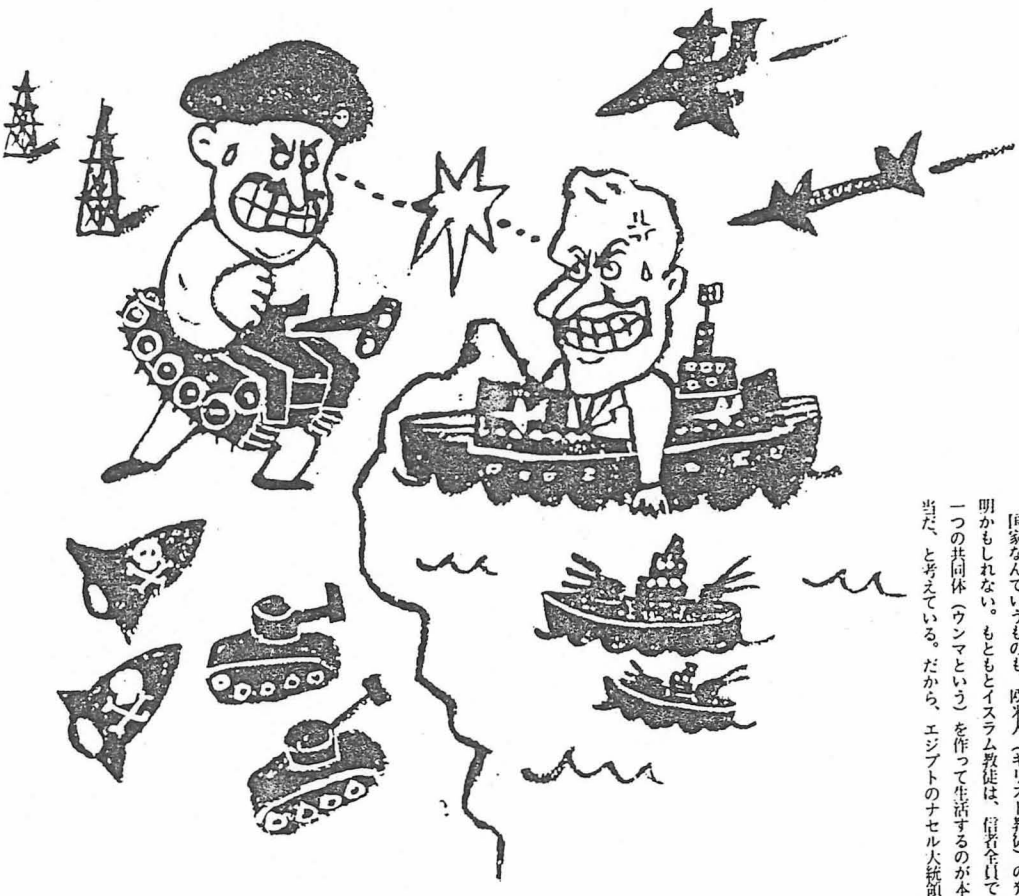
それから、中東が世界最大の油田地帯であることも忘れてはいけない。何もなかった砂漠から、いきなり石油が出た。部族の酋長や王様たちはたちまち大金持ち。クウェートやアラブ首長国連邦、サウジアラビアみたいに、部族社会の伝統を残したまま独立した砂漠の国々は、石油収入の割りに人口が少ないため、国民所得が高い。同じ産油国でも、イラクやイランはぐんと貧乏。シリアやヨルダンみたいな、石油の出ない国もある。そういう国から見ると、湾岸の産油国がうらやましく仕方がない。一九七三年、アラブ産油国を中心とするOPEC(石油輸出機構)が、原油価格を急激に上げた。原油を握りつくす間に、ドルでも多く貯蓄して、近代化を進

のような有力な拠点が現れると、アラブ諸国はたいてい大きな単位にまとまろうとする。イスラエル教の連帯の前には、国境なんて目じゃないのだ。欧米流の民主主義にとって、国境は神聖なもの。理由もなく乗り越えてはいけない。でも、イスラエル教徒は、その感覚が少しちがう。国境なんて、上字軍のときみたいに乗り込んで来た欧米列強が、植民地をこしらえて勝手に線をひいた名残りじゃないか。だから、イラクのフセイン大統領みたいに、腕つばしの強いリーダーが現れると、一般国民は、イスラエルや西側の勢力を追いついてほしい、アラブ世界を統一する強大な国家が現れるとつい声援してしまう。

日本は、どうすればいい? 日本人は、中東問題が大の苦手。それは、宗教(特にイスラム教)が理解できないせいである。海軍首相は、この八月、トルコ、ヨルダン、エジプトなど中東五ヶ国を訪問するはずだった。でも、イラクのはげで「事情が変わった」からと、ハイ中止。日本が平和に控えているナサントだったのに、まったく惜しいことをした。日本の政治家が中東やアラブに無知であることをさらけ出して、ほんとに恥ずかしい。

イラクとアメリカは、決めのないまま睨み合いを続けている。イラクの武器は、人質と化学兵器。アメリカの武器は、経済封鎖と国際世論。いくらアメリカが強くても、クウェートからイラクを追い出すのは、ちよつと手こずりそう。下手に乗り込むと、イラクは対抗して化学兵器をイスラエルに投下。その返返しに核兵器と、ひつちり時間かけて、兵糧攻めがよい。クウェートのことはゆつくり考えようとして、いまいちばん大切なのは、イラクみたいな腕すくのやり方が、周りに合わないことをはっきり世界に示すことだろう。その点、ソ連や西側諸国の足並みがいちおう揃ったのは取柄だ。今回の湾岸危機をうまく切り抜けて、米ソを中心とする世界的な危機管理の枠組みを作れば、第1、第2のイラクは、当然現れないはずだ。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 社会学者。「仏教の言説戦略」(勁草書房)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)などの著書がある。……なすすべもなく右往左往。日本のふかいなさに、やりきれない毎日でした。政治家が頼りないなら、われわれがしっかりしなければ。



風雲急のウルグアイ・ラウンド コメも自由化!? 危うし、日本農業

文・橋爪大三郎

子供はみんなバナナが好き。ちょっと年上の人に聞くところから、昔はアイスクリームに劣らぬ貴重品だった。でも最近、見向きもされぬ。八百屋の店先でひと山削り、隅っこに小さくなって。
 それもこれも自由化のせい。量も増え、値段も下がった。輸入のし過ぎでありがたみなくなった。
 バナナに限らず、日本は世界中からありつたものの農産物を輸入している。おかげで、自給率は急降。国内でまかなえるのは、ほとんどコメだけという有り様だ。
 と、そのコメも、輸入の自由化を迫られている。年内にもまるガットのウルグアイ・ラウンドで、その約束をさせられそうだ。このままじゃ、日本の農業は全滅だと、農家の人びとは真っ青になっている。
 ガットは、何を決めるの?

ところでこのガット、正式には「関税と貿易に関する一般協定」という。その頭文字をとったGATT。簡単に言うと、関税を引き下げ、貿易を活性化するのが役目の国際機関だ。自由貿易の旗振り役である。
 第二次大戦が終わったあと、人びとは反省。自分達の国の都合ばかり考え、関税を高くしたり、経済をブロック化したりしてはいけない。また戦争になる。そこでアメリカが言い出した。一九四八年に発足したのがガット。国際通貨基金(IMF)や世界銀行も協力して、自由主義経済のもと、世界の結束をはかることになった。日本も一九五五年に加盟している。

ガットに加盟したら、ガットの協定を守らなければいけない。たとえば、関税を勝手に高くしたり、理由もないに輸入制限をしたり、特定の国だけを優遇したりするのは禁止。そのほか細かい決まりがいっぱいある。関税を下げる場合は、まず適当な国同士が相談(二国間協議)して、それを他の国にも適用する。沢山の国が集まって、その交渉を一度にするのをラウンドという。今回のウルグアイ・ラウンド(五回目で八回目)だ。

●アメリカは特別扱いで、するするい

ところがガットには、奇妙なことがいっぱいある。なかでも奇妙なのが、アメリカの特別扱いである。戦後のアメリカは、ヨーロッパや日本や、世界中に戦災復興資金を貸して来た。それをよいに、外国から輸入しないことにするからよろしく、と、アメリカが頼んで来た。ガットの決まりでは、三分の二の国が賛成すれば、特別扱いになる(ウェーバーの取付)。嫌とも言えず、各国はしぶしぶ承認。以来アメリカだけは合法的に輸入制限を続けている。やっぱりこれは、するい。
 それだけではない。ガットは国際条約だから、議会の批准が必要なのに、アメリカは勝手に批准をさぼっている。日本は批准をすませたから、ガットに違反する法律を作ることができない。けれどもアメリカはガットに縛られず、輸入課徴金をかけるぞ、日本製品を締め出すぞという法権を作って、脅しをかけてくる。そのたびに日本があわてて、輸出を自主規制します、と謝るようになって

●農業問題が、ガットの焦点に

当時からアメリカは農産物の輸出大国。慢性的生産過剰で、小麦も牛肉もたぶついていた。それを補助金をつけ、あるいは援助の名目で、ヨーロッパや日本に売りさばってきた。もともとアメリカは、農産物の同業のたぶつ。その反動でアメリカは、世界中の国々に国内市場を開放した。農産物以外なら何でも買います、というわけだ。それが山手裏交渉の繁栄を支えて来た、と語っている。特日本が、そこから受けた恩恵ははかりきれない。
 50年代、60年代のアメリカは強かったから、貿易を活発にしようと思いをとり、何回も関税の一括引き下げをかけた。特にケネディ・ラウンド(三三三)、東京ラウンド(三三三)はこうやって、工業製品の関税なども下げ引き下げる必要もない、低い水準になった。ところがそのあと、日本やドイツの輸出競争力が強ま

●コメの自由化、待たなし!

アメリカにとって、ECの農業保護政策は目の上のタコ。ただ、自分もずっと農業保護をやってきた手前偉そうにとは言えない。でも背に腹はかえられず、この際どの国の保護政策も全部なくそう、と言いつつ、肉を切らせて骨を切る、大胆な提案である。
 それには、例外があつてはだめ。だから日本もコメを輸入しろ。とんだとばかりだが、仕方ない。

●日本のコメは、たしかに厚く保護されている。でも

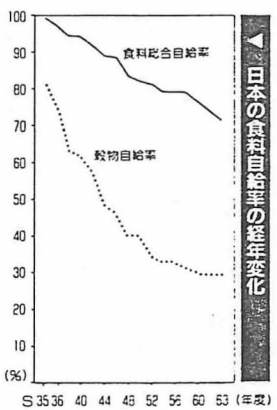
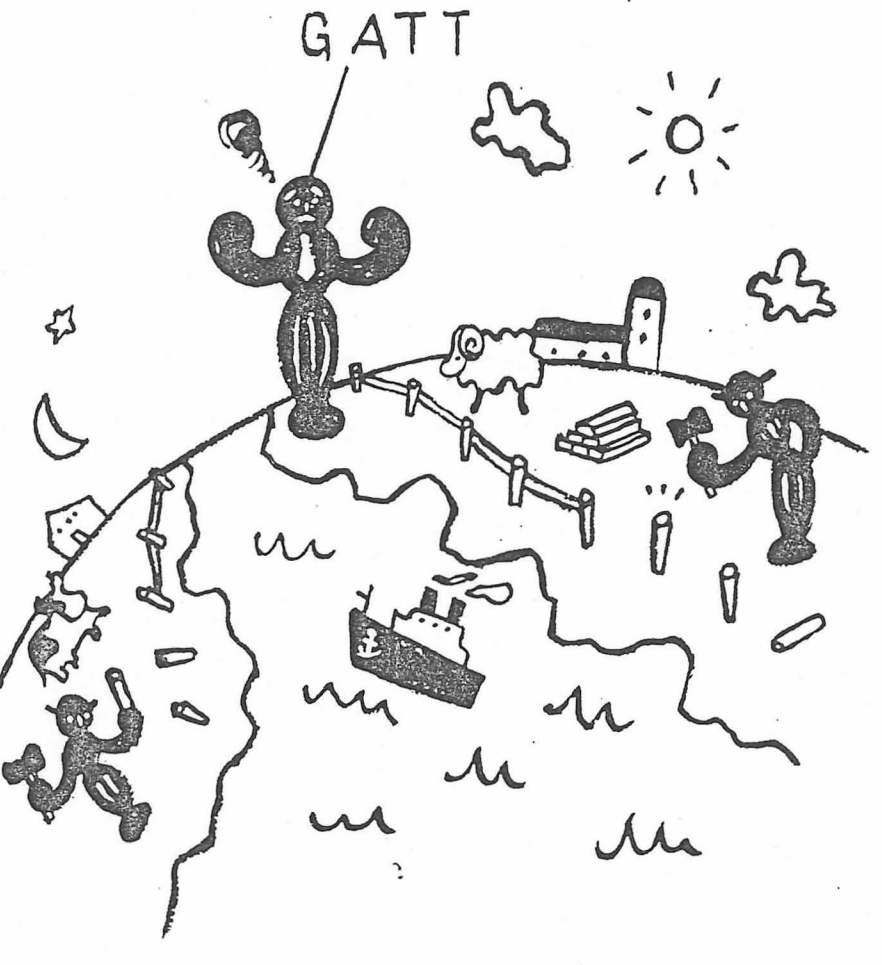
コメ以外の農産物は、ほとんど輸入。アメリカのいいお得意さんだ。日本ほど市場を開いている国も少ないのだ。戦中・戦後の食糧難時代、コメもムギも配給だった。食糧管理制度は、その置き土産である。政府が農家から高めに買入れ、消費者には安く売る。年々米価を上げれば、農家の所得もそこそこと上昇する。まあ、仕組みだ。ところが、コメが獲れず、減反になった。食糧増産も赤字がかさみ、米価の値上げどころでない。農家も後継者難でお先真っ暗のところへ、今度はアメリカがコメの市場開放を迫ってきた。「コメは日本農業の聖域。一

●日本農業に、未来はあるか

税たりとも輸入させない」と、農家は背水の陣である。円高で、日本の物価高は世界一。コメもアメリカで作るより、7倍も高くつく。それならいっそアメリカから輸入したら、と言う都会の消費者も増えてきた。
 とんでもない、自給率の低さをみる、と反論するのが食糧政策論。イラクも食糧が自給できずに、兵糧攻めに遭つて。少々割高でも国内で生産しようという主張だ。今回アメリカは、こんな提案をしている。まず、輸出補助金その他の非関税障壁を、全部関税に置き換える。たとえば、日本が、コメの輸入を認めると、六百%の関税をかけない。するとアメリカと日本の米の値段が一掃になる。つぎにその関税を、10年のあいだに少しずつ下げていき、最後はゼロ(完全自由化)にしよう。
 ECが猛烈に反対しているから、この案が通る見込みは少ない。びくびくしてない。むしろ、アメリカとECががっぷり四つに組んでいるので、日本がキヤスタイン・ボードを握っていることに気がつくべきだ。

●日本として、目先の農業保護ばかり考え、アメリカ

の言い分を無視するのは得策でない。国内消費の二、三割の輸入は消化しよう。そして何より農業経営を合理化し、コメの生産コストをせめていまの半分にする。経営規模も拡大する。猫の額みたいな田んぼでは仕方ないから、米価を上げてもらっていいから、やる気のある農家に土地を集める。そこまで努力すれば、消費者も少しくらい割高だつて我慢するはずだ。
 ただしそれには、ネット時間がかかる。アメリカの10年はせつちかちかするので、せめて10年計画にしよう。アメリカがそれまで待てないなら、ほかの手を考える。日本政府がアメリカを買って、それを第三世界の援助に振り向けるのも一案だ。コメは取量の多いすぐれた穀物だ。コメの味をまず覚えたら、それから作り方を指導するのも、血の通った援助ではなからうか。
 判で押したように、コメの自由化反対、と叫ぶだけじゃだめ。麻雀の一人勝ちみたいに、国際貿易でまんまん得ばかりしてきた日本である。これまでの繁栄が、他国の犠牲のうえに成り立ってなかったか? その辺もよく考え、世界の国々と協調しながら発展できる道を探そう。日本がどんな犠牲をどれだけ払つてもかたを度をはっきりさせれば、どの国も納得できるうまい解決が、きっとみつかるはずだ。



パレスチナ問題をいちから考える

文・橋爪大三郎

和平が、それとも戦争か?! 崖っぷちの東に、世界の耳目が集まっている。この原稿を書いている10月現在（ル・クルの締切りは、発売日より前）、まだにらみ合いが続いていて、まったく予断を許さない。もしかしたら、この文章が皆さんのお手紙に届くころには、戦争の火が切つて落とされているかもしれない。

戦争になれば、イスラエルが巻きこまれる公算が大きい。平和解決の鍵も、じつはイスラエルにある。それはなぜか。ベルリンとナチスとの紛争地帯、パレスチナについて今日は考えよう。

●三ツ巴の宗教対立

パレスチナ問題の解決がむずかしいのは、この土地をめぐってユダヤ教、キリスト教、イスラム教が長い争いを続けてきた歴史があるからだ。

そこです。この三つの宗教の間接だが、どれも一神教。同じ神が分かれた、親戚のような関係である。ユダヤ教の神はヤハウェ（エホバ）。キリスト教の神は主。イスラム教の神はアラー。合計三人の神様がいます——と考えたら誤解もいけません。この三者は同一人物、いや同一神なのだ。キリスト教徒は「聖書」を聖典の「言葉」として大切にしているが、このうち旧約聖書の部分はユダヤ教からの借り物である。イスラム教徒の聖典は「コーラン」だが、「聖書」もアラーの言葉に違いないとみて、それなりに大事に考える。

●ユダヤ民族の約束の地

さて、「旧約聖書」によると、昔ユダヤ民族が砂漠をさまよっていたところ、神様が現れて、カナンの地（いまのイスラエルのある辺り）をあげよう、と約束したと

いう。そこでユダヤ民族は、先住民族を追っ払って国家を建設。ダビデ王、ソロモン王の時代には繁栄を極め、エルサレムに立派な神殿もこしらえた。が、その後はじり貧で、バビロンに捕囚されたときには国もなくなってしまう。許されて帰国し、やっと神殿を再建したものの、紀元一世紀、ローマに反抗して敗れ、故国を追われた。以来千年のあいだ、世界を流浪する民族となった。

ユダヤ民族は勤勉なので、どの国でも有力な勢力になるが、やがて煙たがられて追放される、というこの繰り返しの歴史。近代になって各国の民族意識が高まると、ユダヤ民族のあいだにも、心のふるさと、シオンの丘（エルサレムの象徴）に帰って国をつくらう、というシオニズムが起こった。このプランがイギリス、アメリカを動かして建国されたのが、イスラエルだ。

●パレスチナにも、国を約束したのに……

ところが問題なのは、その場所に、千年以上におわたってアラブ人（イスラム教徒）が住んでいたことだ。彼らパレスチナ人にとっては、イスラエル建国など殺耳に水。先祖伝来の土地を、ユダヤ人たちに奪われてはたまらない。どれだけ外国で迫害されていたか知らないが、アメリカの後押しでやってくる彼らは、やっぱり植民地主義の侵略者に見えてしまう。

アラブ人は、東はイラクから西はモロッコあたりにかけて住んでいる。第一次大戦の頃まで、オスマン・トルコに支配されていた。トルコが戦争に負けて、解体されてしまうと、入れ替わりにイギリス、フランスなど列強がどつと入ってきて、中東一帯をてんで分割。植民地として縄張りを主張した。

植民地を統治する常套手段は、分割統治。つまり内輪もめを焚きつけて喧嘩にしようだ。イスラム教徒にもスンニ派に対するシーア派、そのまた分派のドゥルーズ派、サウジアラビアのワッハブ派……。そのほか、レバノンにはキリスト教のマロン派、エルサレム

のユダヤ教徒、……と、中東は宗教の博物館と言われている。そのほか、クルド族、ベルベル族など、小さな民族集団が沢山ある。まあまあ平穏に暮らしていたものを、片方に武器弾薬を与えてそのかす。パース党（アラブ復興社会党）やムスリム同胞団なども入り乱れ、中東は紛争の火種だらけの「火薬庫」になってしまった。

●アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。

しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

アラブ諸国の独立は、植民地の線引きをおおむね踏襲したため、これらの火種もそのままだと持ち越されてしまった。しかも、パレスチナ地方に住んでいたアラブ人、つまりパレスチナ人は、独立を約束されていたのにユダヤ人が割り込んできて独立しそこなったため、火種がもうひとつ増えちゃった。

1947年11月29日	国連総会でパレスチナ分割決議成立
1948年5月14日	イギリス委任統治終了。ユダヤ国民評議会、イスラエル国樹立宣言
1952年7月23日	第1次中東戦争(1949年エジプト・イスラエル休戦協定成立)
1956年6月・7月	ナセル、クーデターに成功(エジプト革命)
1956年6月・7月	ナセル、エジプト大統領就任。スエズ運河会社の国有化宣言
1957年6月5日	第2次中東戦争
1970年9月28日	第3次中東戦争勃発(イスラエルがシナイ半島、ゴラン高原、ガザ、ヨルダン川西岸、東エルサレム占領)
1973年10月6日	ナセル急死。サダトが大統領になる(10月17日)
1979年3月26日	第4次中東戦争勃発
1981年10月6日	エジプト・イスラエル平和条約成立
	サダト大統領暗殺

注：戦後の中東戦争と中東問題にからむ主要なできごとを中心に時系列にまとめた。年表は、集英社「イミダス」の中東戦争の頃の年表を参考に当編集部で作成しました。

↓ エルサレム旧市街には、メッカ、メディナにつくイスラム教信者の第3の聖地神殿の丘、ユダヤ教ゆかりの嘆きの壁、キリスト教信者巡礼地のひとつで、キリストが十字架にかかったゴルゴダの丘等々多数の遺跡がある

[エルサレム旧市街]



の地域を、アラブ地区/ユダヤ地区/国際管理地区(エルサレム周辺)に三分割する決議を採択、米ソはこれを支持したがアラブ側はこれを拒否した。これを受けて一九四八年、ユダヤ人がイスラエルの独立を宣言すると、エジプトをはじめとするアラブ諸国軍は一斉にパレスチナに攻め込む(第二次中東戦争)。イスラエルは連年撃つて押し気味に戦闘を進め、一九四九年の休戦協定では支配地区を一・五倍に拡大した。いっぽう、どきどきまきまきにヨルダン河沿岸地区、エジプトはガザ地区をそれぞれ自国に併合したため、パレスチナ人が独立するための土地は、地図の上から消えてしまった。

戦争の後には、国連の安全保障理事会で、こんな決議が採択された(二四)豆決議。①イスラエルは占領地から撤退すること。②アラブ側はイスラエルを承認すること。③パレスチナ人の権利を回復すること。ところがイスラエルは、この決議にも知らん顔である。

●エジプトからイラクへ、中東の聖主パトロン

対イスラエル戦をいちばん熱心に戦ったのは、エジプトだった。けれどナセル大統領の死後、サダト大統領は、それまでの親ソ路線を改め、アメリカに接近する。そして一九七三年、キャンプ・デービッドで、イスラエ

●アメリカは今何を考えているのか

一度でも戦争に負ければおしまい。人口がわずかに四百万人あまりだけれど、強力な軍隊を持っている。そして、アメリカの後ろ楯を失わないよう、活発なロビー活動を展開、議会やマスコミに深く食い入っている。アメリカもイスラエルを、中東政策の切り札に使ってきた。アラブ世界はこれをにががしく思っていた。

●和平をめぐる、舞台裏の駆け引き

アメリカの根拠地、国連の安保理事会は、一月十五日までに国連決議に従わないと武力行使するぞとイラクに警告。その圧力を背景に、フシユはフセインに、直接話し合おうと提案した。いよいよフセイン大統領は、勝ち目のない戦争突入か、向う凡つぶれの撤退か、どちらかを選ばなければならなくなった。

形勢不利と判断したのか、二月六日、イラクは人質の全質解放を発表した。アメリカをはじめ各国は、これを歓迎。人質問題が片づけば、イラクの言い分だとして一理あるんじゃないかと、耳を傾ける国が増えるかもしれない。アメリカも少しは、イラクに譲歩せざるを得ないだろう。戦後ずっと無視されてきた、パレスチナ人の権利をどうやって回復するか。イラクをどの程度までこらよくさせるか。この複雑な方程式が解けるかどうかにか、中東の行く末がかかっている。